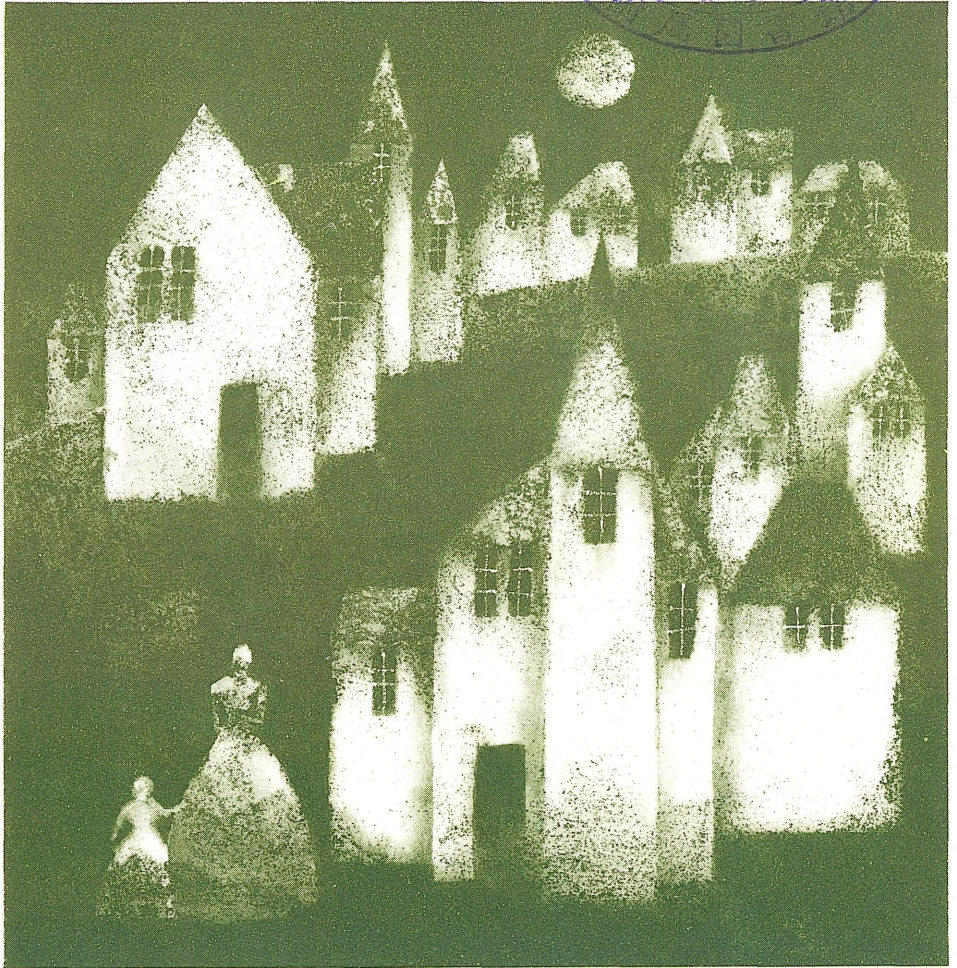
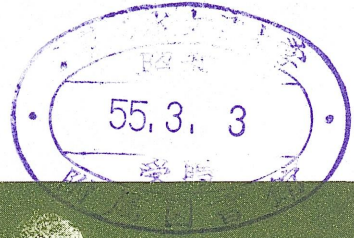


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

4



第七十九卷 第四号 日本幼稚園協会

幼児の教育

第七十九卷 第四号



1216.

幼児の教育 目次

——第七十九卷 四月号——

© 1980
日本幼稚園協会

表紙 駒宮 録郎
カッ ト 中島 英子

思い出草……………和田 陽平…(4)

ランゲフェルトの教育学……………和田 修二…(9)

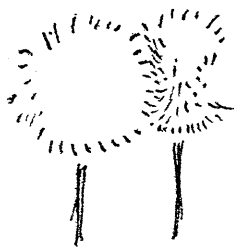
幼稚園・保育所の定員はこれでよいか……………守屋 光雄…(18)

行事の報告……………(24)

ルソーの夢

——むすんでひらいて考——(その十九)……………海老沢 敏…(28)





倉橋惣三への一つの接近(その一)

——「たけくらべ論」に見られる「子ども観」

の多層性——……………本 田 和 子…(36)

◇児童文化探訪

リリヤン……………皆川美恵子…(42)

図書紹介……………(52)

遊びと子どもの発達④……………加古里子…(54)

保育の体験と思索

——子どもの世界の探究——(三十三)……………津 守 真…(57)

思い出草

和田陽平

幼い頃の記憶は、忘却の暗闇のなかに、微かに点々と光る螢火のように頼りない。

ハレー彗星

明治四十三年の五月、ハレー彗星が現れた時には、地球が尾のなかに入ることになり、人心不安に乗じて、災難除けのこわ飯を売り出して儲けた人が、大阪には、あつたそうである。

私は家の人達と一緒に、庭の築山の縁台に腰掛けて、大きなほうき星を眺めた。それは遙かな西の夜空、黒い丹沢の山並の上に、白い尾を長く横に引いていた。

しかし、その時の私は、まだ三歳に満たない。これは恐らく、後年、大人達から聞いた話が、いつの間にか、自分の記憶のようになってしまったのだろう。

ジクムント・フロイトは幼時、弟ユリウスが死ねばいいと思った。ところが、ユリウスは彼が望んだ通り、生後僅か八ヶ月で死んだ。フロイト後年の神経発作の原因は、ここにあるという。だが、ユリウスが死んだ時、フロイトは、まだ一歳七ヶ月。そんな赤ん坊が、弟が死ねばいいなどと、果して考えるかどうか。また、その心の傷が永く無意識裡に残るなどという事があり得るだろうか。私には全く意想外だが、抜群な頭脳の持主には、そのようなことがあるのかも知れない。

俣の災難

人力車は明治二年に発明されたものだそうだが、私の子供の頃は、全く普通の乗物であった。

ある雨の夜、母と私は、招かれて、よその家に行くことになった。俣に乗った母は、私を膝にのせ、俣屋さんは梶棒をあげて、ゆるい坂道を二三歩走り出した途端に、いきなり滑って尻餅をついた。突然、俣が止り、急に梶棒がさがり、しかも下り坂のこと、母は私を膝にのせたまま放り出され、車夫の頭を飛び越えて、泥道に落っこちた。幸、着物が泥んこになっただけだった。

再び乗った時には、「坊ちゃん、今度は大丈夫ですよ」と俣屋さんに言われたような気がするが、本当に今度は何事もなく走った。幌についた小さいセルロイド張りの窓に、町の軒燈のあたりが、次々に行き過ぎた。雨に滲んだ灯のまわりで、セルロイドの細かい疵が光の暈を作った。

後年、田舎道を自動車に乗せて貰い、カーヴに差し掛かった処で、ハンドルの柄がボッキリと折れ——こんな珍しいこともある——車は真一文字に一間ほど下の田圃に勢よく飛び込

んだ。この時に、先ず頭に浮んだのは、幼時の俣の災難であった。

鰻頭

お江戸日本橋七つ立にはじまる東海道上上りの唄の第三節
六郷あたりで川崎の、まんねんや。

鶴と亀とのよね鰻頭、

こちゃ神奈川いそいで保土ヶ谷へ。

こちゃえ、こちゃえ。

私の子供の頃の聞き覚えでは、「六郷わたれば川崎の」であって、六郷の渡しを渡ったところに、鰻頭屋があったものかと思っていた。

だが、たまたま見た天保七年版の『江戸名所図会』の鶴見橋の絵には「橋より此方に米鰻頭を売る家多く此地の名産とす。鶴屋といへるもの尤も旧く、慶長の頃より相続するといへり」とあって、橋より此方とは、絵から見ると、鶴見川の川崎側の方のようである。

試みに広辞苑で、「よね鰻頭」の項を見ると、江戸浅草金竜山の麓で売っていた鰻頭、と出ていたりして、麓とは浅草寺

の門前地のことかどうか、私にはよく分らないが、とにかく、よね饅頭というのは、どうも方々にあったらしい。私の子供の頃には、今の鶴見の花月園の入口のあたりに、よね饅頭の店があり、それは昔の道中唄や名所図会のそれとは縁のないものであったかも知れないが、白と茶色の、珍しい紡錘形の饅頭であった。

私の生家は横浜市内ではあったが、その頃は、まだ郊外の俵をとどめており、坂の上には小さな甘酒茶屋があったりして、そこいらに田舎の饅頭屋があった。今はバス停留場の名だけに残る「藤棚」には、大きな藤棚の下に床几を置いた、名物藤棚饅頭があり、また、私の家の近所、伊勢町の布袋饅頭は布袋様の姿を焼印で押し、餡は赤砂糖の味がした。

私は家のうしろの桃の木に登るのが好きだった。一番高い枝に跨って、おやつやの布袋饅頭を懐から出して食べながら、遠く遙かな保土ヶ谷の、森、家、畑のつらなる空を見渡して、孫悟空の舂斗雲十万八千里、空を飛び翔る思いをするのであった。誰であったか、石楠派の俳人の句に

柿の木に登りしは風の昔なり

空を渡る颯々の風は昔も今も変りはないが、私にはもう、空を翔ぶすべもない。

浅草花屋敷

宇野浩二の『苦の世界』には、思いに屈した三人の大的男が、浅草花屋敷で、ドンガラガッカ・ブーブの楽隊の音に連れて廻るメリー・ゴー・ラウンドに乗って落馬したり、頼にむやみ矢鱈に鱧をやる情景が描かれているが、これは宇野浩二大正九年の作であって、私の記憶に残る花屋敷は、それよりは古い。

『苦の世界』にも載っている操人形の桃太郎は私も見たが

オニガンマラバ、ウタントテ

イサンデイエラ、デカケタリ

幟を差した勇ましい桃太郎が、足を頭よりも高く、ピンピンとあげて出発する光景に、ドッと笑った記憶しかない。

正直な森の番人が、悪漢に鉄砲で撃たれ、子供達が取り纏って泣くという、西洋の活動写真を観たのは、花屋敷であったかどうか、それも定かではないが、私は現に父と手をつないでいながら、自分の父が殺されたような錯覚に陥り、わっと泣き出した。どうやら私は大変な泣き虫であったらしい。

牛乳屋の火事

家の近くの青木牛乳店には、小さな牧場があり、数頭のホルスタイン種の牛が、黒土の上に寝そべったり、佇んだりしていた。柵の外の南向きの斜面は、群がり咲くイヌノフグリ
の空色の小さい花が、春の日を受けて揺れていた。私は兄や姉のあとについて、よくその辺で遊んだ。

ある晩、皆で一緒に汁粉を食べている最中、突然、揺半の半鐘が鳴り出した。家の下の往来を慌しく走る足音がする。火事だ、という声も聞える。「こりゃ、近いぞ」と、父は立ち上った。私は幼いので、匙で汁粉を食べていたが、それを放り出して、雨戸を開けようとすると父のそばに駆け寄った。戸を開けた途端、真っ赤に焼けた空一面に、金粉を撒いたように舞い上る火の粉に仰天した私は、父にしがみついた。寒い季節でもないのに、歯がガチガチ鳴ってとまらない。

「牛乳屋だ。青木が火事だ。」

火勢が静まって、茶の間にもどった時には、放り出した匙に、乾いた餡がこびりついていていた。

それにしても、匙についた乾いた汁粉などが、どうして記

憶に残るのだろうか。

フォース・ジュライ

七月四日、米国の独立祭の夜、横浜の港で花火が打上げられた。その頃、海岸通りは、じかに海に接しており、ずっと先の、山下橋のすぐ近くに、煉瓦建てのグラランド・ホテルがあった。

私達は、ホテルの前の、海際の石崖に腰掛けて花火を待った。足もとの崖に、ひたひたと寄せる波の、微かな音は、辺りの人達のざわめきに消されて聞えない。暗い港に、解が時々汽笛を鳴らしては、忙しく行きかった。

空も港も夜ははれて

月に数ます船のかげ

はしけのかよいにぎやかに

よせくる波もこがねなり

(明治二十九年・教育唱歌)

月は無かったが、遠く、防波堤の突端の、二つの燈台の灯は、たがいに海を照らし、更に遙か遠く、海を隔てた神奈川あたりの街の灯は、横一筋の小さな点になって瞬いた。

私達のうしろのグラランド・ホテルの二階では、祝宴が始まったらしく、華やかな夜会服の西洋婦人が見え隠れした。

突然、火花は息を継ぐひまもなく、矢継早に打ち上げられ、赤・白・青の光は、見上げる空一面に散らばって、港の海も、燃えるように照り映えた。仕掛け火花のナイヤガラ瀑布は白銀の光の滝を海に注ぎ込んで、私達の顔まで真っ白に照した。

私は、この日の情景を、忘れることは出来ない。

大正十二年九月一日、グラランド・ホテルは大地震で瓦礫となった。中に居た人達は全部死んだ。

海のあなたにうすがすむ

汽笛一声新橋を、に始まる鉄道唱歌は、一番の新橋から、六十六番神戸に終る長丁場で、これを全部、そらで歌える人は当時でも、殆ど居なかった。ところが後年、宴会の席で必ず終りまで歌う人があって、聞く人は誰も、十三番「いでてはくぶるトンネルの、前後は山北小山駅」のあたりまで来ると、沼津で急行に乗り換えてくれないかなと、ひそかに思う

のであった。

窓より近く品川の 台場も見えて波白く

海のあなたにうすがすむ 山は上総か房州か

当時、品川の辺は、汽車が波打際を走り、御台場の遙か彼方に千葉の山々が青く霞んで見えた。私は、この歌の「うすがすむ」という意味がよく分らず、猿蟹合戦で向う鉢巻勇ましく、屋根から飛び下りて、悪い猿を押え付けた臼はあの山に住んでいるのかと思ったりした。

× × ×

近頃、小学校の先生から聞いた話に、

子供達の作った劇の、浦島太郎が竜宮から故里の浜に帰った場面で、大きな蟹が現れた。

帰って見ればこは如何に

もと居た家も村もなく

路に行きあう人々は

顔も知らない者はかり

唄の通り、帰って見れば「怖い蟹」が出て来た訳である。今も、私と似たような子供が居るものとみえる。

(明星大学)

ランゲフェルトの教育学

和田修二

I

マルチヌス・ヤン・ランゲフェルト (Martinus J. Langeveld) は、一九〇五年オランダのハーレム市に生れた。彼の父は北部のテキセル島出身で、新教の一派であるメノ派の小学校長であったが、あらゆる教育活動は創造的でなければならぬという信念から、絵画や工作や唱歌を積極的に教育活動にとり入れようとし、のちにギムナジウムと実科学校を結合した総合^{リッテム}中学の最初の芸術科の教師となった。彼はまた、第一次大戦前にはフランスとイギリスに、戦後はドイツにそれぞれ家族を伴って留学したことがあり、ランゲフェルトはこの父の影響で早くから人間の創造的な活動に興味をもつと共に、言葉の重要さと外国語の実践的な必要性

本誌七十八巻第二号において、M・J・ランゲフェルトの「子ども世界のモノ」(『子どもの人間学研究』一九五六年・所収)を掲載したが、今回、ランゲフェルトの学問的背景を紹介する。尚、昨年十一月に来日された時の講演も掲載を予定している。

を実感することができた。

ランゲフェルトの両親は、最初彼を実科学校に入れたが、途中から総合中学のギムナジウム課程に転学させた。彼はそこでギリシャ語、ラテン語、英、独、仏語を学び、大学に進んで心理学、社会科学、哲学、言語学を学んだ。彼は少年時代に異ったタイプの学校で経験した豊かな交友関係と、教師であった父の日常的な活動の見聞を通じて、既に人間と教育に対する強い関心と前理解をもっていたので、大学では専ら人間との関わりにおいて諸科学を学ぼうとした。しかし、当時の諸科学は教育の現実とは全く関係のないところで行われており、しかも自然科学的な見方や方法に強く影響されていた。哲学もまた教育的現実と無関係である点では例外でなく、哲学者たちは、彼らが問題にしている人間が、

実は子どもから成長したおとなであることを看落しており、人間の認識を語る際にも、子どもの認知や体験がおとなのそれとは異質なものであることを忘れていた。心理学においても、人間の「行動」を科学的実証的に分析し、社会的に「条件づけ」ることが主要な関心事となり、人間の「自己」を科学的に認知可能な心理、以上のものとして探究しようとするのは、主観的非科学的であると考えられていた。

このような状況の中で、ランゲフェルトに最初に大きな影響を与えることになった人物は、アムステルダム大学のフィリップ・コーンスタムと、P・H・ポスであった。ランゲフェルトはギムナジウムの学生であった一五二五年にコーンスタムの主宰する合唱団の一員として彼と出会っていたが、当時物理学の教授であったコーンスタムは、第一次大戦前後から教育に強い関心を持ち、やがて物理学をやめて哲学、教育学、実験心理学を研究し、アムステルダム大学に教員養成課程を設立した異色の碩学であった。ポスはフッサールとリッケルトのもとで学んだ哲学と古典諸学の教授であったが、ランゲフェルトは彼のすすめで当時ハイデッガーやヨナス・コーンのいたフライブルク大学に行き、また、ハンブルク大学でカッシーラーから哲学を学んだ。当時のオランダの大学には、まだ心理学の講座がなかったので、彼は同時にハンブ

ルクでウィリアム・シュテルンについて心理学を研究し、更にライプチヒ大学に移ってテオドル・リットから教育学を学んだが、特にリットとは、終生堅い師弟愛に結ばれることになった。

この間、ランゲフェルトの両親は、息子の外国留学に対して十分な資金の援助ができなかったので、ランゲフェルトは自ら働いて学資を得なければならなかったが、その時の病院助手としての経験と神経生理学者のゴールドシュタインとの出会いが、その後の彼の人間の発達研究における身体の意義と、教育と医学の協働の必要性を強く意識させることになった。

教育学で自活するためと、教育学は単なる一般的な理論や実験からではなく、実際の教育経験から生れた思考の中で正しく捻りあるものが得られるはずだという信念から、彼は一九三一年に大卒を出ると直ぐにギムナジウムの教師となった。以来、一九三九年までの八年間教鞭をとることになったが、この間に詩の会を通じて出会ったティチア・バックカーと結婚し、また中学生の「言語と思考」の発達研究によって一九三二年に学位を得た。彼は教師になると直ぐに、私的な教育相談を開始したが、これは困難に際会している個々の子どもの援助と研究が教育学の重要な義務であると考えたことと、一九二〇年代にアメリカからヨーロッパに入ってきた科学主義的な教育相談の立場に満足できなかったからで

あった。彼はまた、国語と哲学の教師としての経験から、言語教育に関する教科書を書き、学級構造の心理学的研究を行い、そのかわり、アムステルダム大学で発達心理学を教え、一九三七年に同大学の私講師となった。

その後、ランゲフェルトは一九三九年にユトレヒト大学の一般教育学及び発達心理学の準教授となり、一九四六年に正教授となったが、彼が就任と共にユトレヒト大学に独力で開設した教育学研究所は、今日では中等教員養成、中等以外の学校教育学、臨床教育学、障害者教育、社会教育、一般理論的教育学、個別教育方法学、教育史、教育心理学、成人教育、大学外の諸機関との研究所の十一部門、一五〇名の所員と一五〇〇名の学生を擁する研究所に発展し、オランダにおける教育研究の中心となった。この研究所の特徴は、そこでの研究が教育の基本的な事実から出発したものであり、人間が直接経験している「生活世界」を重視するものであること、理論の形成は常に実践的に有効な、成長しつつある人間の助成に貢献し得るものであることがめざされ、従って各部門がそれぞれ固有の教育実践と深く結合していることであった。

ランゲフェルトは一九七二年にユトレヒト大学を退官したが、この間に「国際教育研究推進協会」(International Association for

the Advancement of Educational Research)「国際教育評論」(International Review of Education)、「ヨーロッパ教育学年報」(Paedagogica Europaea)の共同設立者、「ブクタ・ブシコロギカ」(Acta Psychologica)等の編者として第二次大戦後の西欧の教育学界を先導し、また、フランスやジャマイカなどの社会的に疎外され差別されている少数グループの文化的教育的に遺棄された子どもたちの教育にも尽力した。

彼はまた、「理論的教育学提要」(Beknopte theoretische paedagogiek 1945; Einführung in die Pädagogik 1951)「子どもの人間的的研究」(Studien zur Anthropologie des Kindes 1956)「子どもの信仰」(Kind en religie 1956; Das Kind und der Glaube 1957)「子どもの道程としての学校」(Die Schule als weg des Kindes 1956; Scholen maken mensen 1967)「教育学と現実」(Erziehungskunde und Wirklichkeit 1971)の如き著作を通じて、教育学に現象学的方法と人間的視点をとり入れた研究を発達させた人として知られている。彼は更に、子どもの発達を周囲のおとなとの出会いと協働のもとで行われる子どもの創造的な自己と世界の発見の歷程であると考え、子どもの診断やテストに当っては、診断しテストする者の存在自体が子どもに対して形成的に影響せざるをえないという事情を顧慮して、心理学者不在の心理テストを批判し、絵画

法による子どもの発達の診断と治療をかねた「コロンプス・テス
4」(Der Columbus-Methode zur Analyse der Entwicklung des
Kindes zum Erwachsenen 1969)を考察し、子どもの人間学的研
究と臨床教育学の開拓に貢献した(Wenn Kinder sorgen machen
1977)。

II

ランゲフェルトにとって、教育とは何よりもわれわれが日常経
験することのできる「人間的な生の最も基本的な事実」であっ
た。人間はこれまでも子どもを生み、育て、若者を訓練してきた
し、現に今もそうしている。人間は誰でも最初は子どもとして生
れ、まわりの人間の助けを受けて徐々に発達して成長した人間、
つまりおとなになったのである。しかるに、従来の哲学的な人間
学が問題にしてきた「人間」は、この「子ども」と「発達」とい
う視点を全く欠落した抽象的な人間一般であったし、子どもの発
達を研究しようとした児童心理学や発達心理学は、この過程を全
く「自然な過程」と考えて、一般的法則的な人間の「生理」や
「心理」に還元しようとすることに急であった。だが、実際に子
どもを育てたり教育したことのある者の経験からすれば、子ども
の発達は子どもとおとなの協力のなかではじめて生起するところ

の、それぞれの子どもの「生活状況」と深く連関した、どの子ど
もにも「独自の過程」である。ランゲフェルトの思想と研究の特
徴は、この教育者の日常的な直接経験を軽視するのではなく、ま
さにこの経験を出発点として、人間と教育の問題を学問的に究明
しようとした「教育的な」人間学であり、「経験的な」教育学で
ある点にあると言えるであろう。

ところで、人間が誰でも最初は子どもであるということは、わ
れわれに子どもを人間の本質的な存在形式として理解すること、
子どもの在り方を通じてわれわれの人間の本質理解を問直すこ
と、換言すれば「子どもの人間学的研究」を要請する。その際、
さし当って明瞭なことは、子どもが「全く無力で頼りない」存在
として生れてくることである。従って、子どもは自分を助成して
くれるおとなの存在を絶対的な前提条件として必要とする人間で
あるといつてよい。しかし、人間は他の動物と違って予め確定し
たいかなる本能ももたないから、おとなが子どもを助けたり教え
たりすることは、おとな自身がそれを自分の「課題」あるいは
「責任」として引き受けなければ起り得ない。子どもからみた人
間は、この意味で、ランゲフェルトによれば二重に本質的に「教
育されなければならない動物」(animal educandum)なのである。
最初からおとなによる助力を前提として生れてくる子どもは、

それ故、普通に養育されている場合は、いつも周囲の人や物に対して「開かれた」態度、無邪気な「信頼」をもって生きている。

子どもはこのため、周りから極めて影響され易く、また自分から進んで身近な人物を模倣し、自己同一化しようとする。ランゲフェルトは、子どもはまず「基本的な安全」が保障され、「行動の手本」が存在し、自ら身体を使って「活動する機会」があるとき、外に向って積極的に行動し、そのつど自己の可能と限界を「経験」することを通して、徐々に新たな自己と世界の像を発見し、形成してゆくことができるのであって、発達とはこうした「より偉大な存在」をめざす子どもの創造的な自己発見のための「探険」の歷程だと考えたのである。従って、子どもの発達の理解は、単に外から子どもの行動を測定したり分類したりするのではなく、子どもが現に生きている世界に立入って、彼がそこで何から離れて何に向おうとしているのかを、子どもと共に発見しようとするのが大切であるが、このような姿勢は既に教育的なものであると言わなければならない。ランゲフェルトは、まず子どもの発達の客観的科学的な把握が教育の理論と実践に先行すべきであるという当時の学界の支配的見解とは逆に、子どもを初めから教育され形成されたものとして、しかしそれなりに創造し自己形成しつつある主体として、子どもと出会うとする教育的な視

点が、却って子どもの正しい理解を可能にするという立場から、一方では教育学的な発達心理学の樹立を試みると共に、他方では子どもの人間学的考察を軸として、広く諸科学の成果を綜合し、批判的に教育と教育学の中に統合しようとした。ランゲフェルト自身は殆ど「教育人間学」という言葉を使わなかったにもかかわらず、彼が第二次大戦後にドイツに発達した教育人間学の先駆者に教えられるのは、このためである。

子どもが本質的におとなに依存した人間であるとすれば、子どもはおとなとの日常的な交渉の中で絶えずおとなから影響され、おとなは子どもの発達を限定しているといつてよく、その限り、おとなの世代は好むと好まざるとにかかわらず子どもの教育に事実的な責任があると言わなければならない。しかし、ランゲフェルトはこの日常的な交渉の決定的な意義を認めながらも、交渉を「教育に先立つもの」として教育と区別し、交渉に際しておとながその子どもに対する自分の教育的な課題と責任を自覚した時、交渉は教育に変わるのであって、そのような教育者としての自覚と実行を助けるのが教育学の使命であると考えた。

それ故、われわれがわれわれの生活の中で事実的に教育と出会うのは、特定の影響、即ち子どもを発達させ、子どもが自分での生活課題を達成してゆくことができるようにすることを目的

としたおとなと子どもの交りにおいてであつて、ランゲフェルトの場合、「教育」とは子どもを自立した人間、おとなへと成長させることを自明の目的とした、その時をもって終了する助成過程を意味したのである。彼は人間の形成が歴史的社会的文化的な広範な生の連関に根ざした複雑な過程であることに注意しつつも、無制限な教育概念の拡張による教育科学の混迷を斥けることによつて、伝統的な教育学 (Pädagogik) をおとならしさの実現をめざした「規範的実践的な子ども人間学」として再構成しようとしたのである。従つて、おとな自身の不足を補うための成人教育や生涯教育は彼の教育学の枠外となるが、しかし教育学の問題は学校や家庭に限られるのではなく、人間生活全般が絶えず子どもという人間との関連において、教育学の内容となるのである。

教育が子どもの成人をめざす援助である以上、教育は常におとなの世代の生活形式や価値観を子どもに伝達し、子どもをそれに同化させるといふ課題をもつ。従つて、教育学はおとなの世代が何を望ましいおとなの像と考えるか、いかなる生活を人間にふさわしい価値あるものと考えるかという、おとなたちの人生観、世界観と関わりざるをえない。しかし、ランゲフェルトは、こうした理想的な人間の像や生活形式の決定は、哲学や政治や宗教、芸術の立場からも可能であつて教育学固有の課題ではないと考え

る。教育学に独自の課題は、むしろ人々がさまざまな立場から人間にふさわしい価値あるものと考えたことを、更に子どもという人間に適しているか、子どもにふさわしいものを圧迫しないか否かという視点から選択し、補足するところにある。何故なら、子どもはいつまでも子どもではなく、必ずおとなになるべきだし、子どもはいつまでも十分に実現することなしに完全なおとなになることはできないし、教育者の基本的な倫理は、子どもの人間的尊厳が犯されないよう子どもの立場を「代理」し、子どもとおとなの生活を良心的に「仲介」するところにあると考えられるからである。

勿論、子どもの立場を代理するといつても、子どもはおとなに對して子どもであるところの、おとなに依存した存在であるから、歴史的具体的な子どものイメージはその時々のおとなのイメージに呼応して変り得るのであるが、しかし、全く無力な、教育を必要とする動物として生れるという子どもの基本的な存在形式には、変りがない。従つて、われわれがこの無力な子どもの存在を肯定し、教育の事実的な必要性を認めるならば、われわれは子どもという人間存在と、教育という特殊な人間関係を可能ならしめるような人間の全体的な見方と生活の条件とは何かを反省し、その見方と条件にてらして、われわれに向つて提起される様々な

要求と、その要求の背後にある人間観・世界観を批判的に取捨選択しなければならぬ。ランゲフェルトは、このためにはわれわれが少くとも人間を本質的に「社会的」な、しかし「個別な差異のある」存在として、また単に受動的な機械的に行動するのではなく自らの在り方を反省し選択できる自由をもつという意味で「道徳的」に等価な、「人格的」存在と考えるべきならず、人間が価値的な違いを認識し価値の実現を志向することが可能であることを認めなければならないという。何故なら、教育関係は子どもよりよき発達を希うおとなと、そのおとなを信頼し、自らより偉大になろうと意欲する子どもの出会いから生れる「自発的な援助と服従」の関係であり、そのような出会いと関係が可能となるためには、上の人間学的前提が不可欠であるからである。

発達しつつある人間は、自分を被護してくれると共に、自分に未知の世界を開示し、自分をより偉大な存在へと解放してくれるような「人間のモデル」を求めているが、そうした親和的であると同時に解放的に働く力を「権威」と呼ぶならば、「教育関係」は本質的に権威関係であり、被教育者から権威者と認められた者のみが、「教育者」であることができる。その際、子どもの最初の自然な権威者、教育者は「両親」であり、学童にとっては「教師」であるが、両親や教師は単に権威を装うのではなく、実

際に権威を獲得しなければならない。ランゲフェルトは権威と自由を対立的にではなく、権威が子どもの自由を創ると考え、発達しつつある人間は、権威ある「人物」から価値ある「行動」に、更にはその行動を価値ならしめている「規範」に服従し、自己同一化することによって道徳的社会的に自立してゆくと考える。そして、より偉大になろうとして自分の権威者を求める遍歴の果てに、若者が無力で寄るべないのは子どもだけではなく、人間存在そのものの本質的な境位であることに気づき、もはや頼るものがなく、究極的な答がわからないような時でも、人はやはり決断しなければならず、その結果を自分に引き受けなければならないことを知った時、その人間は完全に自立したのであり、同時に責任をもって実社会に参加する用意ができた、即ち「成人した」のであって、その時から今度は彼自身が年少者から見れば頼もしい人間のモデルに、即ち権威ある者になると考えるのである。

従って、子どもの発達と教育の目的である人間の自立性、成人性は、社会や文化の違いによって内容的に差異があるにしても、ランゲフェルトは少くとも三つの基本的な特徴をもつと考える。その第一は「責任性」である。おとなは自分自身の行為の結果を引き受けるという意味で、また共同生活を営む上で仲間と仕事を分担し合うという意味で、更に子どもや病人や老人のような弱い

者の代理となるという意味で、それぞれ責任を引き受けることができなければならない。それというのも、もしおとなの世代がこれらの責任をとらうとしなくなれば、あらゆる人間的な生活は崩壊してしまうからである。しかし、おとながこの責任を引き受けることができるためには、おとなはもはや自分が他人の重荷になることなく、それどころか他人を援けることができるだけの実力、知識技能を身につけていなければならない。従って、おとならしさの第二の特徴は「有能性」である。しかし、おとなは同時に人はいかに努力したところで完全に全ての責任を引き受けることはできず、人の能力には限界があることを知らなければならず、それ故にこそ進んで互いに援け合い、信頼することができなければならない。独善でない共通の認識、「良識」をもたなければならぬ。その意味で、おとならしさの第三の特徴は積極的な「助力への意欲」であり、「信頼性」である。おとなの世代がこのような特性をもっている時、この世代は確かに人類の存続と文化の発展という人間の課題の継承に貢献することができるのである。

しかしながら、この課題がなぜ継承されねばならぬのかという問いには、合理的な解答はない。この課題を拒否し、子どもをもとうとしないことにも、それなりの理由がつくからである。ランゲフェルトは物事の意味を合理的に問うのは「理性的な動物」で

ある人間固有の能力であるが、事物の意味は決して完全に合理的に説明し尽すことはできないし、単に理性的であるだけでは人間であるためには不十分だと考える。われわれも、われわれの子どもも、自ら願ってこの世に生れてきたわけではない。従って、人はなぜ存在し、何のために生きるのかという問いに対する明確な答がなければ、われわれの生は全くの偶然と不条理の無明に沈まざるをえない。それにもかかわらず、われわれが成長して現に理性的に考えるものとなることができたのは、われわれの出生を喜び、われわれの教育を己が責任として引き受けるという非合理的な選択と献身をした人々がいたからである。換言すれば、そのままだは何ものでもない子どもに対する両親や教育者の献身的な世話の中にある「無私的な愛」こそ、実は人間生活に意味と価値とを付与するあらゆる創造的活動の根源であり、人間的な生の、究極の意味であって、この愛に基づく教育が、何故自分は生れたのかという問いへの絶対的な回答だというのである。

ランゲフェルトにとって、人間の人間である所以は、単に理性的存在であることではない。理性をも超え得る自己超越の可能性、合理的に考えれば無意味と思われるものにも敢て献身できるところにある。そして、このような献身によって無から新たな価値を創り出す力が愛であり、この献身的な愛に生き得るが故に人

間は尊厳なのである。従つて眞の人間の成長はただ独立することができることではなく、進んで他者のために奉仕することができるようになることである。人が子どもをもち、親となる、ということとは、その意味で決して瑣末なことではなく、人間の尊厳と深く関る選択であり、人間の成長の証しである。ランゲフェルトが専門科学的な立場から直接教育に指令しようとするような専門主義的な態度を排し、常に両親の側に立つて教育しつつある人間を支援し鼓舞しようとしたのは、教育行為自体が既に、特定の人間の本質理解の表現であり、両親の中には人生の根本法則が現にはたしていることを確信していたからであつた。

一方、教育学を教育経験に基づく教育的状況の開明から出発させようとしたランゲフェルトの立場は、自ら教育学と現象学の接近をもたらすことになつたが、しかし彼は、現象学を現象学的哲学としてではなく現象学的方法として、フッサールが「生活世界」と呼んだものの領域に限つてとり入れたのであつた。それというのも、教育学は形成的な意図をもつた本質的に実用的な科学であつて、純粹な本質直観のみをこととする書齋の思弁にはとどまることのできないものだからである。

人間は、ランゲフェルトにとっては、有限な一回限りの人生を生きる本質的に独自の存在であるから、彼はまた、人間を客観的

な対象としてさまざまな部分に解体し、人間の生を機械的な過程に還元してしまふような非人間的な科学と、その科学に基づく人間の操縦を厳しく批判せざるをえなかつた。人間の教育は、予め決められた目標に向つて人間を「条件づけ」することではない。教育はそれぞれの人間にその者独自のよさを気づかせ、自ら価値を選択し、価値を実現してゆくことができるように助けることであり、われわれはそのために一方では子どもや若者の正当な冒険と自己主張を認めると共に、それにふさわしい責任感と有能さを身につけるよう、絶えず彼らに要求し激励しなければならぬ。従つて成長した者とまだ十分に成長していない者とは、互いに排斥し合うのではなく協力し合うことが必要であるが、そのような協力をつくり出すためには、われわれはまた、互いの相違を尊重し、物ごとの量よりも質に注目することと、課題に即して誠実に、臆せず、しかし謙虚に「直面」し合うことを学ばなければならぬ。この点、「学校」は今日全ての子どもが必ず通らねばならぬ道程となつたが、それ故にこそランゲフェルトにとっては、われわれの学校がそこで子どもが公共の世界を知り、他人と共にある存在として自己自身を積極的に経験し、発見することができるような、眞に人間的な人間をつくることができる「子どもの道程」となっているか否かが問題であつたのである。(京都大学)

幼稚園・保育所の定員はこれでよいか

守屋光雄

外国では

世界の保育事情と日本のそれとを比較すると、先進諸国では、保育は一元化され、保育機関の規模も小さく、クラス定員も少ないところが多いのに、日本では、保育は二元化され、保育者の担当児童数は多く、かつ小規模の施設が少ないことが指摘できよう。

多くの外国について述べるよゆうがないので、比較的近い資料に基いて、ソビエトとスウェーデンの実情を明らかにしたうえで、日本の幼稚園、保育所の定員問題について考えてみたい。

ソビエトではどうか

ソビエトでは、一九五九年来、それまでの保育園（〇〜三歳）と幼稚園（三〜七歳）を統合し、教育省一本で管轄

される「保育・幼稚園」が制度化されているが、たとえば、日本の幼稚園に相当する年齢児のクラス児童数は、

二十五人で、一園は、三ないし四クラスを原則とし、小さい園では、一―二クラスのところもある。各クラスは、二名の教師が担当し、一名の助手がついている。各園には、専任の音楽指導員、医師、看護婦、用務員が配置されている。又、園長、メトジスト（教授法担当教師）、主任看護婦、副園長、経営主任、専任会計、会計、事務員、炊夫長、炊夫、大工、倉庫係、衣類係、洗濯係、掃除夫などの職種が別れていて、それぞれの職務を分担している。

（伊集院俊隆「ソビエトの就学前教育」教育学講座4 就学前教育 一九七九年 学習研究社）九五―一〇三頁）

次に、スウェーデンはどうか

スウェーデンでは、一九七六年に発令された新保育法に

より、皆保育をめざして、保育行政が推進されているが、保育所は、子どもの生活基盤である地域を中心に―それぞれの住宅から約五百メートルのところに設置されねばならないということが、一九七五年にできた建築基本法に明記されている。従って、地域中心に、小規模の保育所が、数多く配置されることになっている。

たとえば、ある公団住宅のニュータウン（住民数三万人）には、五百の保育所（生後十ヶ月ないし一年から保育）があり、ある園では、児童の定員が十数名で、そこで、専任の園長のもとに、三人の保育者、一人の給食係が常勤し、近隣の保育所と兼務の看護婦一名が配置されている。定員三十人位の保育所が大多数である。

しかも、スウェーデンは不況で経済成長率も低いにもかかわらず、企業が社会保障基金を生み出して、それを保育所づくりにあてているのである。

（一番ヶ瀬康子「国際児童年と子どもの人権」――スウェーデンの保育に学ぶ――「はらっぱ」9号 一九七九年乳幼児発達研究所 六一―一六頁）

日本の幼稚園・保育所の定員

日本では、東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）附属として幼稚園が設立されて（明治九年一八七六年）、百有余年になるが、初めて幼稚園に関する国の基準が制定されたのは、明治三十二年（一八九九年）である。

そのとき制定された「幼稚園保育及設置規程」（文部省令第三十二号）の第三条には、「保姆一人ノ保育スル幼児ノ数ハ、四十人以内トス」、第四条には、「一幼稚園ノ幼児数ハ一〇〇人以内トス、特別ノ事情アルトキハ二五〇人マテ増加スルコトヲ得」とあり、さらに、戦後、昭和二十二年（一九四七年）「学校教育法」が公布され、幼稚園が国の学校体系の一部に組み込まれるようになって、幼稚園の組（学級）編成については、学校教育法施行規則第七章第七十四条（設置基準）において、「幼稚園の設備、編成その他設置に関する事項は、幼稚園設置基準（昭和三十一年文部省令第三十二号）の定めるところによる」とされ、この幼稚園設置基準第二章「編成」の第三条（二学級の幼児数）で、「一学級の幼児数は、四〇人以下を原則とする」と明記され、実に、明治以来今日に至るまで、幼稚園のクラス定員は四〇人と変わらない。しかも、この定員数は、年離別の規定がなされていないため、現実には、定員オリーブ

のクラスが出現することになる。

ところで、保育所はどうであろうか

戦前の託児所については、無原則に近かったが、昭和二十二年（一九四七年）、保育所のことなども規定した「児童福祉法」が公布され、当初は、保母は、二歳未満児十人、三歳以上三十人につき一人という劣悪な条件で発足したが、数度に及ぶ児童福祉施設最低基準の一部改訂により、今日では、漸く、三歳未満児六人、三歳児二十人、四歳以上三十人となり、さらに、所得税非課税世帯の〇歳児が九名以上入所、特別の設備を設けている施設には、保母、看護婦又は保健婦を含め、乳児三人に一人の費用が出るよう配慮されるようになった。

しかし、毎日九時間にわたる重労働かつ低賃金のもとの定員数としては、未だにきわめて不十分なものである。

何故か？

このように先進諸外国に比べて、日本の保育条件とくに定員関係が劣悪であり、幼稚園のごときは、創設以来百余年に及ぶのに四十人定員が何ら改善されずに今日に至っていることは、不可思議かつ大きな問題である。その理由としては、日本の教育わけても、幼児教（保）育などが、国

策の中核とならず、口ではその重要性を唱えながら、総じて安上り行政によって行われてきたことが指摘される。

日本の幼稚園は、創設以来、経済的に恵まれた家庭の幼児を、就学前、家庭教育を補う教育を行なう機関として普及し、戦後は、文部省の所管で、学校教育法に基づく学校として認められたものの、普通教育とは認められず、公立幼稚園は年々増設されてはきたが、私立に比べると少なく、公立幼稚園でも総教育費に占める幼稚園教育費の比率は依然低く、しかも、公立の多くは、就学前の一年保育で、二年保育は比較的少なく、（私立に多い）三年保育は公立共に極めて少ない。また、とくに、私立の幼稚園に対しては、国又は自治体からの補助が少なく、（学校法人立のもの、漸増しているが、規制も強くなっている）そのため、教（保）育条件の改善より、経営が優先し、少ない保育者で、多くの子どもの保育にあたる結果となる。

保育所は、戦前の託児所とちがって、すべての児童が心身ともに健やかに育成することを目的として公布された児童福祉法の理念のもとに発足したにもかかわらず、福祉政策の貧困性の影響をもろにかぶり、保育所の絶対数が不足しているうえに、保育予算もとほしく、保母の低賃金、長時

間（九時間）重労働という劣悪な労働情況をもたらし、保育設備、保育内容の低下をひきおこしている。

— 現行の最低基準（とくに保育一人の受持ち人数）、保育単価のもとで、託児機能を中心に考えられている保育所は、所詮、戦前の託児施設の性格を継承することになり、保育は母親代りの子守りたらざるをえない状況におかれ、研究権さえ保障されていない。

次に、このように保育者の受け持ち児童数が多いということ、つまり、マスプロ教（保）育を許容し、可能にする教（保）育体制についても目を向けなければならない。

日本における従来の教育は、常に人間を人間として捉えず、現社会体制に適応し、役に立つ人的資源という商品（マンパワー）と考え、その商品を製造するための早期からの能力主義的教育が押し進められてきた。それは、かつては富国強兵、いまは経済効率向上のために役立つ人間の養成にある。

教育とは教師が上から「与えるもの」で、子どもは「受けるもの」と考えられ、教師は既成のカリキュラムによって一斉、画一、かつ一方交通的に知識を与え、子どもは、自から能動的に思考し、言動することも許されず、いたず

らに、機械的に反覆練習し機械的に記憶するという学習が強制されることになる。そして、このように、子どもの自主性や個性を無視して、教師の欲するワクにはまる従順な子どもを養成することを望む管理や経営の優先する教育は、一人の教師の受持人数の多いマス・プロ教育の中でも可能であり、むしろ好都合とさえいえる。しかし、与える教育、一斉、画一、管理・経営優先の教育からは、フレール以来、教（保）育の原点となっている子どもの自発的活動、創造的思考は発達しないのである。

保育所では、前述のように、子どもを預かる機能が優先し、保育内容がそれ程問われない発想にあり、子どものケヤイが可能という観点から、保育の受け持ち人数が決められてきたのであるが、当然とは云え、保育所も子ども預り所にとどまることなく、集団保育の中で子どもの発達を保障することが要求される以上、このような児童数を、しかも、長時間保育することは不適當といわねばならない。日本の保育所も、発足以来三十有余年を経過し、保育条件も少しずつは改善されてきたが、当初の定員があまりにも不当であったため、今日の条件といえども、決して充分な

のではない。保育所が、子ども預り所から脱皮して、子どもの発達保障、保育者の研究権、母親の労働権（育児権）の三つの権利が三立、又は同時保育されるような体制を確立するためには、保育条件をはじめとする現体制の抜本的改革が必要である。

さらに、幼稚園のクラス定員が百年の長きにわたって改善されないでいる理由として、たしかに、右に述べてきた幼児教（保）育軽視、安上り政策、管理優先の画一、一斉教育が指摘されるが、保育者自身の専門職員としての自覚―自己批判も含めて―の不足、さらに、その背後にある「保育者養成教育」にも大きな問題があることを忘れてはならないと思う。

日本では、幼・保が二元化し、それぞれの目的、機能の相違が強調され、「教育」と「保育」の概念が対立的に捉えられ、幼・保の保育者の免許、資格も異にしている。将来は、両者の差別を撤廃し、保育者の免許や資格はすべて専門コースのある四年制大学（又は大学院）の卒業者に与え、保育者の資質を向上させることが切望されるが、従来
の教員養成校では、教育技術の訓練が重視され、教育愛が

強調され、「技術」と「愛情」の持ち主が教師として評価される。しかし、その基礎として、「哲学すること」が欠落しがちであった。「ハウツー」(How to)ばかりを求めて、「ホワイ」(Why)を問おうとしないと、いつも対症療法に追われて、原因追求を怠ることになり、そこでは、経験ばかりが重んじられ、理論は軽視され、実践と理論は遊離してしまう。「哲学する」とは、何故？ 何のため？ 懷疑し、探求し、思考することである。

ただ、子どもが好きで、多少の技術に秀で、体験さえつまかさねれば……という安直な教師観におぼれてしまいがちであった。又、従来の保育者養成機関においても、さまざまな科目を習得させたり、技術の訓練することに追われて、読み、書き、語り、考えるという自主学習や、社会的科学的な認識を高める学科の講義や演習などが欠落していたことは反省されねばならない。

「愛情」と「技術」と「経験」だけを重視し、「哲学」を欠落した教師観をもった教師ないし保育者は、つい既存のカリキュラムによる一斉、画一教（保）育にも何ら疑問を感じないで、教師の権威によって、この「与える教育」に従順な、創造性もない、人間性を喪失するような子どもを

作ってしまうことにおちいりやすい。このような教育であれば、何十人、何百人を受けるとしても、笛一つで、どうにでも子どもを操ることができるのである。

尚、保育者自身の自覚の問題とも関連があるのであるが、保育者が従来、若い女性で占められ、結婚までの腰かけ仕事位の考えで幼稚園や保育所に就職していたものが相当あったことも否定できない。保育者の就職期間が、平均二年とか云われるのも、労働条件の劣悪さによることもあるが、一、二年で結婚し、離職していく実態もあることを申しそえておく。このような問題についても、保育者自身の自覚、自己批判がない限り、マスプロ教（保育）育は改められず、保育者の進歩も子どもの発達保障も期待できない。

おわりに

海外諸国の保育実情にかんがみ、又、私の専攻する乳幼児心理学ないし保育学の研究や実践の結果をふまえると、保育者の受持ち人数などについて、私は次のように考えている。

一歳児では、二人に、二歳児には三人に、三歳児には十五人に、四、五歳児には二十五人に一人の正保育者が担当

し、他に、それぞれ一名の助手をおく。又、別に、看護婦（保健婦）又は養護教員一名を常駐、非常勤医師を依頼、随時、クラスを解体し、複数が担当する。女性保育者だけでなく、男性保育者も配置する。障害児の統合保育のための加配。又、各園の設置も、人口割でなく、地域を中心に、小規模のものを数多く作る。そして、このような保育体制を実現できるよう国政の抜本的変革を図ることこそ肝要である。そしてそれは、諸外国の実情もふまえ地域を中心として、保育者、親、住民が連帯し、学習し、行動することによって可能である。教育福祉の後退は絶対許してはならぬ。

（兵庫女子短期大学）

参考文献

- 守屋光雄 「保育の原点」(新読書社 一九七二年)
- 「保育学原論」(朝倉書店 一九七三年)
- 「子どもを生かす保育」(筑摩書房 一九七六年)
- 「愛情」と「技術」と「哲学」(「リード」第14巻11号)
- 一九七八年「リード」図書出版
- 岡田正章他編「就学前教育事典」(第一法規 一九六六年 三五―四二頁)
- 植山つる他編「戦後保育所の歴史」(全国社会福祉協議会 一九七八年)
- 日本保育学会編「日本の幼児教育」(チャイルド本社 一九七九年)

◆先回の山下俊郎先生原稿は、昨年十二月一日に御執筆を頂いたものです。その時点でのマスコミのあり方に触れていますので、御諒解下さい。 — 編集部 —

幼稚園における行事について

柴田 いつ

四日市市立保々幼稚園

幼稚園における行事は、幼児の生活の中に自然と位置づいて、それが刺戟となり、園生活のリズムに変化を加え、幼児たちの生活を豊かにしていくものでなければならぬと考えている。行事のための行事をするのでなく幼児の成長に役立ち、たのしさと充実感があり、余韻の残るような行事と考えている。

〈入園式〉—新鮮で期待感のあるものに—

入園式までに、幼児をより理解し、ひとりひとりに適した指導をするために、一日入園や面接日を設けている。当園は、新入園児とその保護者ならびに在園児あわせて収容できる施設がないため、午前午後に分

けて行っている。つまり四歳児・五歳児別々に入園式をもつのである。年長組は進級した幼児と、隣接の保育所(当園はフェンスへだてて、幼稚園と保育所と隣接)からくる五歳児とで編成されている。母親と朝登園し、まずテラスでやさしく担任に迎えられ、名札をつけてもらってから、保育室に入って自由に遊ぶ。(ままごと・人形・絵本・ブロック等、遊びたくなるようなコーナーづくりをしておく)。十時、七十四名の幼児と保護者で二十坪の保育室に入り、入園式を行う。園長の話のあと、各保育室に入り、意欲と期待の持てる担任の話を聞いたり歌をうたったりして、お祝いのバッグをもらって帰る。(このバッグは前年度の幼児がつくったもの)。四歳児は午後じゅうたんを敷いた保育室で、お母さんと一緒に座り、安定感をもって担任のお話

を聞く。家庭的な雰囲気の中で四歳児らしい反応を受けとめながら、明日からの園生活を喜んで待ち、楽しさを胸を広げてやりながら、帰園させる。なお、四歳・五歳の対面式は、三日後に行っている。来年度は、ホールもほぼ新設されそうなので入園式のもち方を考えなおさなければならぬ。なにはともあれ、幼児にとって、新しいスタートの日にふさわしく楽しく胸のふくらむ入園式を計画しなければと思っている。

〈運動会〉—頑張る力と楽しさを—

あくまで幼児たちが、生き生きとして、楽しんでやれる運動会であって、見せるための運動会ではない。だから基本として、ひとりひとりが頑張って自分の力を出せるような種目を取りあげ、幼児の反応や意欲をみながら、また、五歳児については、幼

児の意見も尊重しながら計画を立てている。すなわち、とび箱・平均台・マットなど、させられる活動でなく、毎日のつみあげの中で少しずつその子なりに挑戦しているとうとする力が湧き、友達とも励ましあっているような、そしてまた、クラス対抗など取り入れ、協力の大切さ、ルールの理解など競争心をもりあげてやるなかで知らせていくようにしている。ただ、幼児たちに毎日毎日練習を繰り返さなければならぬものでなく、いままでの経験を生かして、簡単な中にも、しっかり手を伸ばすとか、真剣にスタートラインに立つ、走る、歩くの基本的なことを、真面目にやれる態度と、やりぬく力、そして、幼児たちに自信と、やったという成功感を味わわせてやることを目標にしている。また、それ以上に、教師自身の姿勢も、幼児たちに影響す

るところは大きいと思われる。つまり、幼児といっしょになって感動したり、考えた、喜び合ったりすることは、幼児の気持ちに共感を呼び、意欲をもりあげていくことになる。やはり、平生の生活が基盤となっていくと思われるから、毎日が幼児にとって楽しく、きちんとして充実していることが望ましいと思われる。今後この気持を大事にしていきたいと考えている。

〈発表会〉―全身で表現できるように―

純粹であどけなく、そのものになりきれようになり、さらに、自分なりにつくり出していきける五歳児の発表会を毎年二月下旬に行っている。いわゆる一年間、あるいは、二年間のまとめとして、総合的な発表会であるので、幼児の成長の姿をどう表わしていくのか、幼児たちが、苦痛を感じて

取り組むのではなく、意欲的に楽しんで、しかも、ひとりひとりの幼児の持味が生かせ、さらに向上していこうとする構えが見えてくるものを、教師と幼児とでつくりあげている。つまり既成の脚本の中へ幼児をはめこむのではなく、幼児たちの身近な生活の中からとりあげ、幼児たちがどう感じと、どのように表現していこうとするのか、工夫しあっている過程を大切にしている。

〈卒園式〉―心に残る卒園式に―

幼児期から児童期へ移行する大切なひとくぎりとして、この卒園は大事な行事である。幼児たちにとっても緊張感をもって、きちんと辛抱できる態度もできてくるし、全体の時間の配慮、式場のふんいきづくりを考慮し、さらに、幼児にふさわしい式次第と厳肅さを保ちながら進めていく。最後

行事の報告

のお別れは、在園児が保育室の前から門までの両側に並び、その中央をお祝いのバラをつけた卒園児が、カーネーションの可愛いい花束をもらって巣立っていく。

紙面の都合上、園外保育、遠足については省略するが、保育室より戸外へ、戸外より園外へというふうに行ける限りおおらかな自然を求めて、幼児たちの心身の開放をねがい、幼児の好奇心や将来心を少しでも満足させてやるための配慮を常に行っている。そして、円満な人格を培ってやるためにも、自然へのかかわりは、とくに重要であると思われるし、これらをふくめて年間における幼稚園の行事についてみなおし、幼児を中心に常に考えていかなければと思っている。

◇ ◇ ◇

水沼 昭子
千葉・愛隣幼稚園

幼稚園が子ども達の何気ない生活の場であってほしいという願いをもって、毎日の園生活を見守っている。「行事」は、日常の保育と遊離しないで、子ども達の生活と密着し、しかも子ども達の、その時々を知恵や力で繰り広げられる内容のもの、見せる事を重視しないで時間も日常の保育時間内で終了する。そのような姿勢の中で以下の「行事」がある。

入園式……入園する子どもと親達だけで行う。集団生活のスタートに緊張している子ども達の、その心をそのまま受けとめるために、在園児達の歓迎などのプログラムはさけて、短時間（記念写真を写しても五分位）で終了。

遠足……春は子ども全員と四歳児の親

で近くの公園へ。徒歩二〇分位。秋は年齢別で実施日、目的地をかえて行い。バスを利用して、しかし市内の公園。平常保育時間内で行う。親は付添わず、子どもと保育者で。年長が実施する日は、年少が休園してすべての保育者が同行する。（年少の時も同様）

運動会……練習はせずに当日を迎える。家族のプレイデー。ピクニックといった感じである。その場ですぐできるようなもの、その年によく遊んでいる遊びを行う。かけっこやリレーなど子ども全員が参加する。又、当日の運営は年長時が受け持ち、親たちの手伝は「蔭の助け手」という存在になってもらう。参加賞にはドングリブローチ（ドングリとフェルトでつつんで、みの虫のようにしてさげる）をもらう。特に

午後は親子が十二チームにわかれて、十五の関所の課題を定められた時間（二十分）の中でどれだけやり通せるかという「動物様は大きすぎ」なるゲームを行う。園庭のあちら、こちらで課題と取り組む親子のほえましい姿がみられて、まさに「大きすぎ」である。一番多く、課題を消化したチームに、秋の果物のペンダントが贈られる。最後は、手紙や名前をかいた紙ヒョーキをみんなとばしておみやげにもらって行く。整然とした運動会ではないが、皆が持味を生かして一日をすごすことができる楽しい会である。

卒園式……「お別れ」というより「出発」といった楽しい会にしたと考えている。一年生になる楽しみ、大きくなったうれしさを感じさせたいと思う。年長になって行った一泊保育の時から生活のグループ毎

に舞台上上り、園長先生が舞台下から証書と聖書を贈る。年少の時のエピソードが一人一人について話され成長した今を実感する。来賓の方は入学する学校の先生、又卒園して大学にいたり、社会に出ている方々をおよびする。子どもたちの生活からかけ離れた方々はおよびしない。

クリスマス……わが国にとって一番大切な行事。親子でクリスマス礼拝を守り、クリスマス・ページェントは年長児全員で行う。役柄を決める時もすぎな人物や物になる。羊飼いが女の子になったりしてもかまわない。このページェントには毎年、年長か年少へ受け渡して行く。年長になったらできるとたのみに待っている。衣装なども子どもたちが各自で作る。見せるというよりも各自が楽しんで参加する、そのほぐえましい聖誕劇は素材ではあるが、まさに馬

小屋に生れたイエス様の素材なしかし、嬉しい出来事、そのもののように思われる。

以上の他に家族ブレイデイや入園ブレイデイ（十二月から三月まで月一回）などがある。又、各月の誕生会は園長夫人の手製ケーキを子ども達が配膳し誕生日の親子を中心に皆がお祝いをする。わが園の「行事」の今後の方向は特にないが、子ども達その時々ベースを用いて行う事。見せる事に固守しないなどをしっかりおさえて、親たちへも、なぜそのような「行事」をくりひるげるのかを伝えながら、これからも大人側が満足するような「行事」をしないで行くように努力して行きたい。又、必要以外の行事はさけて、一人一人が安定した一日一日をすごす事を大切に行きたい。

行事の報告

ルソーの夢

——むすんでひらいて考——(その十九)

海老沢 敏

十一、日本人の歌として(承前)

本稿第三章(三、小学唱歌《見たせば》)で紹介したように、音楽取調掛は、《小学唱歌 初編》および《唱歌掛図 初編》を刊行し、その普及をはかるために、明治十五年の一月末に、公開の《大演習》を催し、デモンストレーションをおこなった。その前後から唱歌教育はその歩を刻みはじめるのである。そうした歩みについてここで述べる余裕はないが、《見たせば》については、なお補足を加えておこう。同年の暮、十二月十二日には、学事諮問会会員による音楽伝習所参観がおこなわれた。この機会に伊沢修二は《唱歌の効益及該科開設の方法》などについて説明するた

め《示論要旨》なる一文を草している。^(注27)彼は音楽が教育上欠くべからざるものである所以を縷々述べ、唱歌の実例をいくつも挙げながら、《唱歌ノ徳育ニ資スル所以》を明らかにしたあと、どのようにして唱歌教育がおこなわれねばならないかについて語り、さらに《其教授ノ方法順序等ノ大綱》を示している。いわばカリキュラムを明示している訳であるが、《第一 口授唱歌、第二 数字練習、第三 音階練習、第四 譜表ノ練習、第五 単音唱歌、第六 輪唱歌、第七 複音唱歌、第八 洋琴、第九 管絃楽》という順序が示され、かつ、それぞれについて説明が附されるのである。

(注27) 信濃教育会編《伊沢修二選集》(信濃教育会編、昭和三十三年)。二八〇ページ以下。

《第一 口授唱歌》には「凡ソ幼児ニ唱歌ヲ授クルニハ先ツ其聴力ノ発達ト声律ノ練習トヲ勉メザル可カラズ。是レ最初ニ此科ヲ設ル所以ナリ」とあり、教師が児童にまず歌って聴かせ、幼な児たちがそれを声を出して歌うという勉強の仕方にならざるもあれ、音楽の勉強のもっとも初源的で基礎的なかたちとして提示されているのである。伊沢修二は、この《口授唱歌》の実例を二曲じつさいに参観者の前に聴かせているが、一曲は伊沢にとつてまことにかわりの深いあの《蝶々》であり、他の一曲が、ほかならぬ《見渡せば》^(注28)なのである。

(注28) 同右書二九〇ページ。

これら二曲の唱歌が実例として選び出されたのは、かでもない、きわめて単純素朴な旋律が、それを聴く幼な児の耳に明快なかたちで捉えられ、かつ、いまだほとんど歌う訓練もしていない彼らの声がそれらの旋律線を正確に再現することができることと伊沢修二によつても理解されていたからであろう。

こうした唱歌指導のために、音楽取調掛は教員養成に着手していた。いわゆる《音楽伝習人》の養成であった。《伝習人》の募集は、もちろん《小学唱歌集》刊行以前から、すなわち明治十三年六月から始められているが、彼らは《唱歌、洋琴、風琴、箏、胡弓及び欧州管絃樂器》^(注29)を学ぶよう定められた。その唱歌伝習も

次のような順序によるものであった。「唱歌を伝習するは、最初簡單なる単音歌曲に起り、漸次高等の唱歌に及ぶものとす」^(注30)。

(注29) 伊沢修二・山住正己校注《洋楽事始音楽取調成績申報書》(《東洋文庫》188、平凡社)二七ページ。

(注30) 同右書、二七ページ。

《伝習人》の伝習期限は一年が原則であり、前半はピアノと唱歌、後半は音楽教育の実習にあてられていたとされるが、^(注31)《明治十四年七月七日音楽取調掛期末試業略記》なる文書では、編集はすでに終了しているものの、最終稿の決定や出版を俟っていた

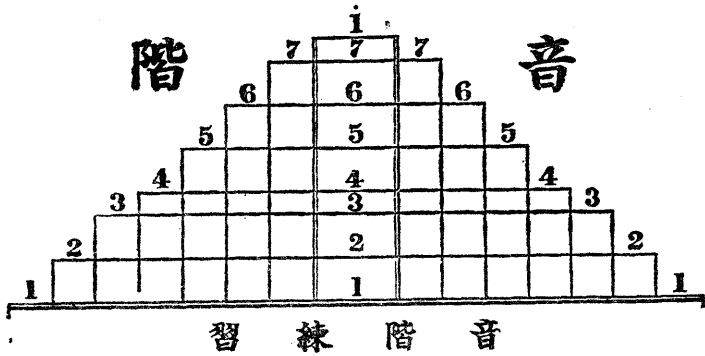
《小学唱歌集 初編》に所載された唱歌が、カリキュラムの前半に取り上げられているのである。伴奏を用いないかたちで歌われるもの、洋琴を用いて歌われるもの、風琴の伴奏によるものと並んで、《琴及胡弓ヲ用キテ唱フ分》として三曲が挙げられ、その最初の曲がほかならぬ《第十三曲見渡せば》^(注32)なのである。

(注31) 東京芸術大学音楽取調掛研究班編・浜野政雄・服部幸三監修《音楽教育成立への軌跡——音楽取調掛資料研究》

(音楽之友社・昭和五十一年)三四四ページ。

(注32) 同右書三四五ページ。

こうした唱歌教育の推進のためには、一方では、取調掛員が、学習院ならびに東京師範学校と東京女子師範学校、あるいはその



- [一] 1,2—2,1— [二] 1,2,3—3,2,1— [三] 1,2,3,4—4,3,2,1—
 [四] 1,2,3,4,5—5,4,3,2,1— [五] 1,2,3,4,5,6—6,5,4,3,2,1—
 [六] 1,2,3,4,5,6,7,i— i,7,6,5,4,3,2,1—

附属学校に対しておこなった出張教授が重要な意味をもって
 いる。他方、各地で設立された師範学校の教員が音楽取調掛に派遣
 されて、ここで唱歌をはじめとする音楽の実践を学ぶというかた
 ち、すなわち〈師範学科取調員〉^(注33)も多くなつていくのである。明

治十六年の七月におこなわれた師範学科取調員の音楽伝習受講者
 に対する試験の結果も興味深い。短期の学習という事情から、試
 験科目は〈唱歌〉と〈風琴〉の二科目だけであるが、計十一人の

取調員が受けた唱歌の試験科目は〈見渡せば〉のほか、〈螢〉と
 〈富士山〉、風琴の科目はおなじく〈見渡せば〉があつたほか、

〈若紫〉と〈をほろ〉^(注34)であつた。ここでも、最初の基本的教材と
 して〈見わたせば〉が位置づけられているのはなほだ意味深い

といふべきであらう。

(注33) 山住正己著『唱歌教育成立過程の研究』(東京大学出
 版会、昭和四十二年)一五二ページ。

(注34) 同右書一五七ページ。

こうして小学唱歌としての〈見わたせば〉はひろく全国に普及
 していったのである。

なお、先に述べた音楽教育のカリキュラムでは、〈第一 口授
 唱歌〉の次に〈第二 数字練習〉が置かれている。「聴力既ニ発達

スルトキハ視力ニ依リテ声律ヲ識別スルコトヲ勉メザルベカラ

ズ。是レ次ニ此科ヲ設クル所以ナリ」と説明されている。^(注35) 《小学唱歌集初編》を繙いてみよう。既に前に紹介した《緒言》のあと、音階を段階状に示した図が置かれ、かつその下に《音階練習》と記されている(図版①)。いずれにも数字が書かれている。《音階》図が示すように、数字は下からはじまり、1から7までつけられ、その上に・1なる数字がある。これこそまさに《数字練習》であるが、下段の《音階練習》は《示論要旨》のカリキュラムの《第三 音階練習》を示していることは明らかであろう。しかし、これも数字によるものである。「音階ハ旋律ノ元基ニシテ諸曲ノ因テ起ル所ナリ。故ニ之ニ習熟セシメザル可ラス」^(注36)とあるが、《小学唱歌集 初編》における音楽の教育が、こうした数字による音の勉強からはじめられていることは注目されるべきであろう。なぜなら、この数字譜こそ、この数字による記譜のアイデアこそ、あのジャン・ジャック・ルソーが着想したものであるからである。^(注37) もちろん、この《小学唱歌集 初編》の数字による記譜は十九世紀になってルソーから展開されたものによってはいるが、音譜に先立って、数字を音と関係づけて、音楽の勉強をはじめるといふ考えは、まさにルソー的といふべきである。この数字を手がかりとして、はじめて《第四 譜表の練習》へと進んでいくものであることは、《小学唱歌集 初編》の《第一 かをれ》の前

▼ 図版 ②

The figure shows musical notation for the song 'かをれ'. It consists of several parts:

- A guitar fretboard diagram on the left with numbers 1 through 7 on the strings.
- A six-line staff with dots representing notes on the strings.
- A treble clef staff with numbers 1 through 7 written below the notes.
- Two lines of rhythmic notation with numbers 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7 written above the notes.

ページに置かれた図表（図版②）からも明らかであろう。しかし、この数字譜の問題については残念ながら別の機会にゆだねざるをえない。

〔注35〕 《伊沢修二選集》二八九ページ。

〔注36〕 同右書二八九ページ。

〔注37〕 海老沢敏《数字譜の歩み》（皆川達夫監修・NHK交

響楽団編《楽譜の本質と歴史》（《楽譜の世界》1、日本放送出版協会・昭和四十九年）一〇七ページ—一一八ページ。

こうして小学唱歌《見わたせば》は、初等教育の教材として、児童たちがはじめて唱歌に接し、それを学ぶことよって音楽の世界へと導びかれていくきっかけとなる曲として、ひろく日本中で歌われていたのである。つづいて、この《見わたせば》のその後の命運について語るべきであろう。

この小学唱歌はこうして明治十年代の後半には小学生の歌として親しまれていったが、この唱歌の旋律が別の経路で明治二十年代に讚美歌としても次第にひろく歌われていったことは既に論じたとおりである。ところが、その同じ明治二十年代には、まったく別の、しかも私たちにはいささか意外なかたちで、この唱歌は日本人のあいだで歌われることになる。それはなんと《軍歌》に変身するのである。明治二十年代といえは、日本が対外戦争の時

代に突入した時期でもあった。明治二十七年八月一日、日本は清国に宣戦布告し、日清戦争の火蓋は切って落されたのである。既に十年ほど前から、清国と日本との関係は危機的となっていたが、そのあたりから、狭い意味での軍歌が意識的に創作されていたものであったろう。しかし明治二十七年にはおびただしい数の軍歌が生み出されるのであった。

明治天皇はこの年の九月十三日、東京を出発し、翌々日、広島第五師団司令部に着かれ、ここを大本営と定められたと伝えられている。「御座所は二階東側四十畳ばかりの一室で、この一室が御寝室も御食堂も兼ねたのであるから、天皇には昼夜この御座所を離れ給うことがなく、朝五時の御起床から深夜に到るまで軍服を召されたまま、軍務および万機を統裁遊ばされた。（中略）この御座所の外側には中庭に面して露台がある。この露台にさえも平素は御出ましにならなかつたが、御夕食の後、軍楽隊が中庭で奏楽をすると、そのときだけはしばしば露台まで歩を運ばせられた。奏楽は陸海軍の軍楽隊がかかるがわる奉仕したのである。軍楽隊は軍楽とともに軍歌をも奉奏した。陸軍側では近衛師団軍楽隊が大本営附つづとなったが、この隊の楽手加藤（当時は菊岡という姓）義清と荻野理喜治との新作になる《喇叭らっぴの響》の軍歌は最近の戦闘の実況をよく伝え曲も勇壮である点から特に御心を止め給

い、たびたび奏唱の御下命があった。海軍側でも種々の軍歌を奉唱したが田中穂積楽長の率いる呉海兵団軍楽隊が海軍軍楽隊編曲の《戦闘歌》を十月十一日夜奉唱したときには『作歌は何人の手で行なわれたか』『この歌はいつから軍楽に用いたか』との御下問を蒙った。^(注38)

(注38) 堀内敏三《定本 日本の軍歌》(美業之日本社・昭和四十四年)八七ページ―八八ページ。

この《戦闘歌》こそ、ほかならぬ《見わたせば》の旋律によるものであった。鳥居忱の作詞になる歌詞は次のようなものである。

一、(進撃)

見渡せば寄せてきたる敵の大軍おもしろや。

スワヤたたかい始まるぞ。イデヤ人々攻め崩せ。

弾丸こめて撃ち倒せ。敵の大軍撃ち崩せ。

二、(追撃)

見渡せば崩れかかる敵の大軍心地よや。モハヤたたかい勝

なるぞ。イデヤ人々追い崩せ。

銃剣付けて突き倒せ。敵の大軍突き崩せ。

作詞者鳥居忱は当時東京音楽学校教授であったが、ほかならぬ《見わたせば》第一節の作詞者である。彼は明治二十八年に三卷の《大東軍歌》なる軍歌集を出版しているが、この《戦闘歌》は明治天皇の前で歌われたのちに、この軍歌集に収められたものであつた。

原曲《見わたせば》が第一節では春を、第二節では秋を歌い、自然の景色をのびやかにものに歌い上げたのに対して、なんという大きな変容であろうか。この《戦闘歌》にはなおテキストの点でいくつかの異稿がある。たとえば次の稿は《海軍軍楽師吉本光蔵》の作である。^(注39) タイトルは《海戦》となっている。

一、(進撃)

見渡せば寄せてきたる敵の軍艦おもしろや。

スワヤ戦い始まるぞ。イデヤ艦隊攻めかかれ。

弾丸こめて撃ち払え。敵の軍艦うちくだけ。

二、(追撃)

見渡せば沈みかかる敵の軍艦こちよや。

モハヤたたかい勝なるぞ。イデヤ艦隊追い迫れ。

水雷かけて打ち碎け。敵の軍艦くつがえせ。

▼ 譜例 ③

戦 闘 歌

3 3 2 | 1 1 | 2 2 2 | 3 2 1 |
 (一) ヨセグルハスハヤテキヨ
 (二) くづるるはあはれてきよ

5 5 5 4 | 3 3 3 | 2 1 2 3 | 1 0 |
 ラーッパタカクナリヲタル
 てーんにひびくときのこゑ

3 3 4 | 5 5 | 6 6 6 | 5 4 3 |
 ミダレチルまマノアラレ
 われははやかちなるぞ

3 3 4 | 5 5 5 | 6 6 6 6 | 5 0 |
 ノベチハシルイナピカ
 りて おへや おへや おひつめりて

3 3 3 2 | 1 1 1 1 | 2 2 2 | 3 2 1 |
 ミーヨハホヘイハッ キーイリヌ
 ひづめにかへけよてきへいな

5 5 5 4 | 3 3 3 3 | 2 1 2 3 | 1 0 ||
 テーキノソナヘハクヅレタイ
 とりこになせやーてきへいな

(注39) 「日清戦争のうちに海軍軍楽師吉本光蔵はこの歌詞を海軍の戦闘に改めて左の『海戦』と題する歌詞を作り、その後吉本楽長はこの旋律をトリオに入れて『進撃追撃行進曲』を作った。」(堀内敦三『定本 日本の軍歌』八八ページ—八九ページ)

さらに明治二十九年五月二十六日発行の《新編教育唱歌集 第二集》にはこの《戦闘歌》は、前二稿とはまったく異なったテキストをもって収録されているのである。

陸軍

(一) 寄せ来るは、すはや、敵よ。喇叭高くなりわたる。

みだれちる丸のあられ。野辺を走るいなびかり。

見よや。歩兵は突き入りぬ。敵の備はくづれたり。」

(二) 崩るゝは、あはれ、敵よ、天にひびく鬨の聲。

われははや勝なるぞ。追へや。追へや。追ひつめて、

蹄にかけよ、敵兵を。とりこになせや、敵兵を。」

海軍

(一) 黒烟空に吐きて、すゝみ来る敵の艦。

待ちてかひありて、うれし。海の底にうち沈め、

国のあたをばたひらげん。あふげ、輝やく軍艦旗。」

(二) わが丸はねらひそれず。もゆる艦に沈む艦。

叶はじと、残る敵は、力かぎり逃げてゆく。救へ、おぼるゝ敵兵を。追へや。逃げゆく敵艦を。」

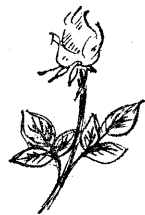
(注40) 教育音楽講習会編纂《新編 教育唱歌集 第二集》東京 開成館蔵版(明治二十九年五月)

最後の稿の楽譜を掲げてみよう(譜例③)。ニ長調という軍隊的で勇壮な調をとったこの《戦闘歌》は、歌詞との関係もあるが、四分の二拍子を取り、《見わたせば》の原旋律の二分音符に対応する四分音符が多くの個所で八分音符に分割されることによって、軍隊的な激しさ、勇ましさ、絶えざる動きを表現するように変えられている。《ルソーの夢》も欧米において、歌詞ならびに旋律の点でさまざまな変容を蒙ったものであったが、明治二十年代の日本が突入していた軍国的な時代にあっても、そうした状況に即応したメタモルフォーズをこのメロディーは経験しなればならなかったのである。ちなみに、この《戦闘歌》の譜にも数字がつけられている。

(国立音楽大学)

倉橋惣三への一つの接近（その一）

——「たけくらべ論」に見られる「子ども観」の多層性——



本 田 和 子

明治四五年二月「心理研究」に、「一葉女史の小説に現れたる子供」という一文が掲載されている。倉橋惣三によって発表された数多い論稿の中で、極めて初期に属するものの一つであった。彼が全生涯にわたって活字化し世に贈った文章は、八二一を教えるとされるが、その中で、三八番目の発表順位を占めるのが、この「一葉研究」であった。

これは、倉橋の論文として初期に属するだけではなく、「一葉研究」としても極めて早い時期に公にされていて、しかも、優れたものの一つと評価されている。例えば、青木一男は、『たけくらべ』論を研究史的に通観した一文の中で、次のように述べている。「この論文は、心理学の立場から『たけくらべ』に登場する少年少女の心理分析をしたもので、鑑賞・批評の分野から見ても

ユニークな好論文と言えよう。^(*)

樋口一葉によって『たけくらべ』が発表されたのは、周知のとおり、明治二八年一月―二九年一月にかけてのことであった。然し、後に彼女の代表作とみなされるこの小説に関しては、二九年発表直後に「めざまし草」^(*)が採り上げて論評し、とりわけ、幸田露伴が心理描写の巧みさを絶讃して以来、不思議なくらいの沈黙が続き、その後、十数年にわたって書評も研究も出現しないという状態であった。そのような状況下に、大方に顧みられなかったこの作品を倉橋があえて論考の対象に選んだという、この出来事は、彼と「一葉作品」との出会い、とりわけ「たけくらべ」とのそれがなみ／＼ならぬものであったことを偲ぼせる何よりの証ではないだろうか。

しかも、その女主人公「美登利」の名前を、彼は、教え子たちの同窓会名として選んでいる。すなわち、東京女高師に附設されていた幼稚園教諭の養成課程、当時は保育実習科と呼ばれた、の卒業生の団体を、「美登利會」と命名したのであった。「美登利」は、周知のように、吉原遊廓の近くに育つ遊女の卵である。姉は、全盛の花魁であり、彼女も、やがては姉と同じ道を歩むであろうことが暗示されている、そんな少女の名前が、何故、幼児保育者たちの団体名として選ばねばならなかったのだろうか。看護婦たちの同窓会が「ナイチンゲール會」とか「聖テレジャ會」などと命名されるのは、余りにもその位相を異にするこの選択にも、一人の興味を唆られざるを得ない。

倉橋にとって、「たけくらべ」とは、そして「美登利」とは、一体、何であったのだろうか。

◆ ◆ ◆
私は、ここで、倉橋と「たけくらべ」との関連を、次の三点から考察することを試みたい。すなわち、(1)「たけくらべ」という物語自体の性格的特色と倉橋にとつての意味、(2)女主人公「美登利」の女性像、(3)「たけくらべ」の舞台空間と倉橋の活躍した保育界という舞台空間の重畳性、の三点である。

わが国保育界のカリスマ的存在である倉橋に対しては、その保

育界の指導者としての側面に焦点が当てられ、しばしば論考の対象とされてきた。そして、その基盤をなす「子ども観」が、信仰とも言えるほどの絶対的な信頼と帰依に支えられたものであり、その結果として無類の楽天的・浪漫的な発達観が導き出されて、彼の教育論の骨子とされた、という指摘が多くの人々によってなされている。

また、一方では、内村鑑三門下であった若き日の倉橋を組上にのせて、そのキリスト者としてのありようにメスを加え、そこを起点として彼の保育論に批判的見解を加えようとする試みも見られる。

ところで、一生を通じて「子ども教」の信奉者であり、高らかに「子ども讃歌」を歌い続けた倉橋が、イエス・キリストに憧憬し、聖書の世界に詩的正義の源泉を見つゝ、同時に、「美登利」という遊女の卵に限りない愛情の情を注ぎ、そしてこの早熟な小娘の中に「永遠のアニマ」を見ていたとするなら、倉橋という一人の人間の中で「子ども」とは、どのような広がりにおいて位置を占めていたのであろうか。イエスの愛し給うた幼な子を一方の極とし、遊里をめぐるこましゃくられた子ども群像をいま一つの極として、その二極間に多層的に遍在する様々な子どもたち。倉橋が、その一つ々と関係を取り結んだとすれば、その子ども観・

人間観は、巷間に定説化されているほどに一枚岩的なものであり得たのか、否か。「たけくらべ論」を手がかりとして私が試みようとするのは、倉橋惣三のこの多次元性に対する搦手からの接近なのである。

(1) 物語の特色と倉橋にとっての意味

倉橋は、「たけくらべ論」の附言として、文学的児童研究の必要性を次のように説いている。すなわち、「実験と分解を主とする研究と、観察と具象的描写とから得る知識とが相補うて、初めて実際に活きている児童を精確に理解することができ^(*)」のである^(*)。しかも、「観る力、描く力」においては、芸術家に如くものは少ないのだ、と。さらに、わが国の場合、「児童観を詠唱説述したものは比較的多くあつても、純な児童の生活のありのままを主材として描写した文学はきわめて少ない^(*)」ゆえに、「たけくらべ」は、「古今の珍宝」として位置づけ得る、というのである。

この論稿が発表されたのは、先に触れたように、明治四五年、倉橋が三〇歳の時であつた。然し、作品そのものとの出会いは、正確に跡づけようもないものの、それよりも可成り早い時期であるろうと推定される。何故なら、彼自身が、先の附言の中で、「比

較的古いこの作を用いたのは、最近の文壇に対する余の知識の乏しきによる^(*)」と断っているからである。この当時の倉橋の周囲には、新進の児童研究者として、また、「フリーベル会」の幹事、機関誌『婦人と子ども』の編集責任者として、漸く多忙な時間がめぐり始めていた。恐らくは、新刊の小説類に広く目を通すことなど、困難となりつゝあつたのであろう。そのゆえに、「かつて」彼の心に鮮烈な映像をやきつけたであろうこの作品が、対象として選ばれたのであつた。

周知のとおり、倉橋は、明治一五年の生まれである。従つて、彼の少年期は、巖谷小波によつて最初の少年文学と目される「こがね丸(明二四)」が発表され、続いて、博文館から「お伽文学」「少年文学」のシリーズが相次いで刊行されるという、わが国児童図書草創期と軌を一にしている。それゆえに、彼も、時代の子として、それら少年文学のあれこれと出会いつゝ成長の歩みを歩んだであらうことは、想像に難くない。

明治期最高のベストセラーといわれる中村正直訳の『西国立志編』、あるいはジュール・ベルヌの科学小説なども全く無縁であつたと考えることは、むしろ不自然に過ぎよう。また、明治一一年生まれの寺田寅彦や、一八年生まれの谷崎潤一郎が、その少年時代の読書体験として、それぞれ『絵本西遊記』や『経国美

談』を挙げていることから見て、倉橋にも、ほぼ同様の読書歴を想定せざるを得ないかも知れない。

ところで、ヴェルヌの小説や『経国美談』は、そも／＼が青少年文学とは言い得ず、小波らによって整えられた少年文学の系譜とは、自ずからその性格を異にしていた。にもかゝらず、それらに一貫するある種の共通性、すなわち「男っぼさと行動の論理」とでも言うべき特質を、そこに認めざるを得ないのではないか。それらは、若者たちの視線を外に向かわせ、行動への意欲を唆す。作品世界の登場人物たちが、そのように行爲し、それら前向きのモラルのいない手であったことは言うまでもない。こうして、当時の若者文学は、立志・勤勉・努力などの日常的な価値の体系と、通俗的なモラルに裏付けられた世界を読者の前に出現させ、その体制的な表側の論理に若者たちを巻きこむべく機能したのであった。事実、多くの若者たちが、これらの作品群との出会いを、自分たちの人生の行程にそのように位置づけて成長していった。

これらに比すとき、「たけくらべ」の描き出した少年少女群像は、根底から異質であった。若者たちに向けて、「少年よ、大志を抱け。青年よ、雄飛せよ」と煽り続けているこの時代に、それらとは全く無縁の世界が、「たけくらべ」の中には出現している

のである。債籍を継ぐべく運命づけられ、そのためには学問の道を選ばざるを得ない信如を唯一人の例外として、他の登場人物たちは誰一人として学業などに精を出す者もない。大音寺前という矮小な生活圏内に自足して、子ども同士の縄張り争いに浮き身をやつし、束の間の子ども時代を余念もなく遊び呆けているのだ。

彼らの遊び空間、つまり「大音寺前」と呼ばれるこの裏ぶれた一廓は、吉原遊廓の門前町であった。従って、子どもたちの生活は、多かれ少なかれ、遊廓とのかゝわりにおいて営まれている。例えば、美登利の姉は全盛の花魁であって、彼女が子ども仲間の女王であり得るのも、その余徳で常に豊富な小使い銭の持ち主だからである。正太が家業として継ぐであろう金貸し業も、廓との関係が深かった。廓の繁栄のおこぼれで生計を営み、おはぐろどぶに映る不夜城の灯に憧れて成長する。日常的な庶民の良識が、恐ろしくは眉を顰めるであろうそんな環境の中で、子どもたちは、世間一般が与えるさげすみの「徴」に気付くよしもなく、たゞ瞬間々々を生きているのだった。

春を囁ぐ女を「遊女」と呼び、その女を買い行爲を「遊ぶ」と称し、それを行なう場所に「遊廓」という名を与える。日常生活の外に位置づく男女のことは、いつの頃からか「遊」の字が冠され、「遊び」の相においてとらえられるようになっていた。『たけ

くらべ』の子どもたちの遊び空間は、これら大人の「遊びの世界」と深く結びついていたのである。

遊廓が、囲われた特殊な空間として発達したのは、江戸幕府による体制的な住空間構造化の所産とされている。^{(*)6}すなわち、士・農・工・商という身分制度の確立とその強化がはかられる過程で、そのいずれにも属さない人々は秩序の外に置かれ、通常の民とは異なる特別の「徴つき集団」を形成させられた。これらの人々の居住の場も、日常的な庶民の生活から隔離されて、特別の「徴つき」の場所が用意された。いわゆる賤民部落という被差別空間の発生である。そして、芝居小屋・寺院・売春窟なども、この特別な空間のそれぞれに位置づけられたのであった。

江戸の街はずれに位置する吉原遊廓は、その典型的な姿である。おはぐろどぶで囲われ、大門以外はすべて閉ざされて外界と遮断された特別の空間、日常生活の身分も価値観もその中では通用しない世界、日常的秩序とは別の秩序に支配され、昼は眠って夜に目覚めている逆様の生活、それが吉原遊廓だったのである。

ところで、これら大人の「遊びの場」は、閉鎖的な非日常的の世界であり、日常的秩序の外に位置するという意味で、子どもの世界と同じ位相でとらえられる。子どもの世界とは、本来的に、特別の価値体系と秩序に支配される世界なのだ。例えば、学業成績

が優秀であることにもまして虫捕りの名人が尊敬され、権官を父に持つこと以上に、手品の巧みな親の子が羨望される、というように……。日常的な大人の世界を「俗」と見るなら、子どもの世界は「聖」の徴の附さるべき世界であり、遊廓も同じ意味で「聖なる場所」であった。

とすれば、吉原という、日常的には「辺界の悪所」と蔑まれる場所の近くに位置して、それら遊里と非日常的聖性を極限まで共有しながら、己れらの子ども時代を開花させているのが、『たけくらべ』の少年少女たちである、と言えないだろうか。そして、倉橋が、こゝにこそ真の子どもの世界がある、と観じたのは、この反俗性のゆえとも見ることが出来るよう。

前田愛は、この作品の中には、「子どもの時間が封じこめられている」と評している。^{(*)7}確かに、それは「封じこめられていて、未来へ向かう直線的な時間の流れに合流しようとはしない。倉橋は、それを次のようなことばでとらえた。すなわち、「どこまでも児童の世界を世界としたこの作の、余韻をだに大人の世界へ引き延ばしてないところが嬉しい。」と……。

青少年文学に象徴されるように、この時代は、若者たちを、未来へと直進する時間の奔流にのせ、誰よりも巧みに誰よりも早くそれを泳ぎ、勝利者となることを要請した。子ども時代とは、将

来の英雄に向かつて志を立て、努力の第一歩を踏み出すべき出発地点に過ぎない。そこがスタートラインである限りは、ぐずぐずと止まり続けることは許されないだろう。

然し、『たけくらべ』の子どもたちは、ものの見事に、自分たちの時間を手に入れていた。彼らは、己れらの空間を「大音寺前」という狭く囲われた地域に限定し、但し、そこを完全にみずからのものとして占有していたように、時間をもまた「いま」に止めて、心ゆくまでそこに滞在しようとしている。彼らは、まさしく、子ども時代を「原型として」生きているのだ。

私どもはこゝに、子ども時代の「無時間性」を見ることが出来る。すなわち、子どもという時をさながらに生きる彼らにとつて、通俗的な意味での「時間」は、存在しないに等しいのだ。そして、倉橋の心をとらえたのも、このような「無時間的時間」の輝きだったのである。

ところで、他方で、倉橋は、作品中の子どもたち、とりわけ美登利に訪れる急激な変化に瞠目し、次のように述べる。「しかし、『たけくらべ』が与えてくれる描写の中で、最も貴重に、最も妙をきわめているのは、後半段における美登利が、我まま放題、負けじ気象を押し通して、人を人とも、事を事とも思わない無遠慮無頓着なお侠おやくから、急にむすめに変わってゆく心理激変の描写で

(*)とある」と。子どもとは、決して永遠に子どもではあり得ず、成長という名の変化、当り前でしかも厳粛な事実を引き受けねばならない存在である。そして倉橋は、それを、誰にもまして率直に、かつ肅然と、肯定していたのであった。

彼にあって、子ども時代とは、「無時間」なるがゆえの「永遠性」と、成長という必然を負うものとしての「有限性」の、この両義性において現前するものであった。「子どもの聖性」に関しても、同様である。倉橋は、「児童中心主義者」と目され、それはしばしば、大正童心主義と同列に論じられてきた。然し、彼によって観じられた子どもの「聖性」とは、先にも触れたように、遊廓や賤民集団の顕現する「聖性」と等質であるような、そんな位相にあるように見える。「子どもは天使である」を讃美する一面的・憧憬的なそれらと、果して同列であり得るのか、否か。

『たけくらべ』に対する倉橋の強い関心と執着は、これらに関して、私どもにつきつけられた一つの問いなのである。(つづく)

* 1 青木一男「たけくらべ研究」教育出版センター

* 2 「めざまし草」4(一九二九年四月号)の「三人冗話」という書評欄が「たけくらべ」を激賞している。

* 3・4・5・8・9 倉橋惣三「二葉女史の小説に現われたる子供」倉橋惣三選集第四卷所収

* 6 廣末保「辺界の悪所」平凡社選書

* 7 前田愛「樋口一葉の世界」平凡社選書

リリヤン

皆川美恵子

リリヤンの糸が生れ、この糸を編む遊びが広まった昭和初期の時代は、吉屋信子の活躍した時代でもあった。『花物語』を手にした少女は、その子ども時代にリリヤンの遊びに興じていたのである。女の子の手遊びリリヤンをとりあげるにあたり、吉屋信子の香りを添えてここにとどける次第である。

白きふくよかな手をせし幼女の、紅き糸を指に絡めて、無器用ながらも健気に、初めて編み進みし手芸、そはリ、リヤンか。

早春の緑やわらかな草叢に、朝露含みし蜘蛛の巣のレースにも似て、五つの金の釘を色糸めぐりぐり、やがてかのレースは中の孔より糸紐となりて垂れ下がりにゆく。

リ、リヤン、リ、リヤン、幼き日、手すさびに糸をかけしリ、リヤンよ。いつしか真顔となりて円き環のまわりを編みゆきしリ、リヤンよ。女子の双のひとみは、かくも幼き時より、行きつそして元に戻りつまわる、小さな円き世界を飽かず見つめていたのか。

◆母と子

風糸、独楽の紐、リリヤンと、玩具用の糸類を専門に商う伊藤商店は、祖父映貞氏が浅草の三筋町に店を興し、戦後になって現在の地、浅草橋に店舗を移した。手芸玩具リリヤンを扱う老舗として、市場の大半は卸すというこの店を、蔵前に向って玩具問屋のたち並ぶ江戸通りを行き、左手にそれて横道をしばらく進むと、右手に見つけることができる。店はガラス戸が開け放たれ、三和土の向うが、腰を下ろして算盤を入れながら商談をするといった風情の、あの畳座敷であった。いかにも老舗らしい風格を備えた

店の上方正面には、屋号の看板が掲げられ、その看板には、「伊藤隆夫商店」という字が新たな字の下にうつすら読み取ることができた。

さて隆夫氏というのは、現在の当主秀文さんの父親であり、世の中が落ち着いた昭和二十五年に、店を浅草橋に新たに構え、商売を再開させたものの、口惜しくもガンにより三十四歳という若さで世を去ってしまったとのこと。かくて、母親良子さんがいい知れぬ悲しみを胸に秘め、身じろぐ暇もなく店を守り続け、わが子の成長をいやまして心染しみに待ったのだった。今ようやく秀文さんという若い主人を得て、「株式会社イトウ」は「伊藤隆夫商店」の看板の上に色濃く書き加えられることとなった。

隆夫氏は昭和二十九年に逝き、息子に先立たれた映貞氏も昭和三十五年七十三歳で亡くなり、リリヤン手芸の玩具の起りのいきさつは、雪上の足跡を追うに似て、幾多の春がめぐり来たった後では、もはや尋ねることがかなわなかった。そこで良子さん秀文さんの母子に、まずは知っているかぎりのことをお話し願ひ、探索の糸口とすることにした。

リリヤンという場合、色糸のことをそう呼んだり、色糸を含めた編む道具いっさいを呼んだりする。厳密にはヤーン (Yarn) が

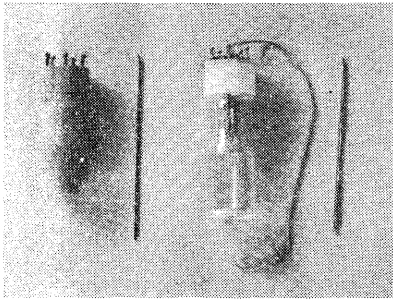
編み糸という意味なので、色糸を呼ぶのにふさわしいのだからけれど、糸を編む道具も、糸を編んでゆく遊びの総称としても、子どもたちはこの「リリヤン」の言葉をあてていたと思う。商店ではさすがにそれでは困るので、色糸を「リリヤン」、編む道具を「ニッチング」と呼び、糸・ニッチング・編み針の一式を「リリヤン手芸セット」と名づけて商っている。

リリヤンの糸、これは現在、その多くが京都で織られ、染められており、材質はレーヨン、つまり人絹とのこと。伊藤商店では京都の植村さんから色糸を5kgの原反のまとまりで仕入れ、尺五の糸巻の木枠に八回巻いた長さの小総にし、小売価格二十円で売っている。

リリヤンの色には十色あり、それぞれを桜、水、鬱金、青竹、黄色、鴉、紫、若草、赤、晒と呼び習わしている。またこのような丸染の他に、三色で染め分けた段染の糸がある。この段染の糸こそは、赤は晒の白に映えます赤く、白を置いた向うの黄色はあくまで黄色く、おのが色を輝くばかりに鮮かに主張した、幼き日の、宝物にもまごう美しい色糸である。編むごとに、糸を繰るごとに変わる、その濃い薄いの移り。ぼかし染のなかばとけて夢に入り、なかば現の幻に揺れし一筋のリリヤン——そのリリヤンに魅せられた小さき心は、その昔どこを廻っていたのだろうか。

握るのに適した形の糸を編む道具「ニッチング」は、勿論 knitting の訛ったものである。昔前は木でできていたが、今は透明なスチロール樹脂となっている。良子さんの話によると、木のニッチングは扉の握りやテレビの足などを作っていた挽物屋さん、ロクロで一つ一つ挽いてももらったのだという。木材は多分一番安いものだったのでしようということで、はつきりしないが、単価の安いおもちゃを手で作っていくのが、しだいに挽物屋さんの方でもあわなくなっていくらしい。

昭和四十年頃に、はじめ不透明なプラスチックに替え、次には透明で編めたものが見えるスチロールにしたという。形は木のニッチングと同じ形で、釘も五本丸く並んでいる。スチロールのニッチングは、現在小売価格が三十円。このニッチング月に六万個、季節的には九月、十月がよく売れ、年間では、百万個が出るという。リリヤンの遊びは、幼い少女の小さな手にすっかり握られながら、やさしく、ひそやかに



今にまで続いているのだ。

さて幸いなことに、店の昔を知る人が見つかった。芦沢三千男（大正六年生れ）さんで、良子さんの叔父さんにあたる。芦沢さんは、昭和六年から十年程、伊藤商店に勤めていたという。その頃店では盛んにリリヤンのおもちゃを商っていたので、昭和四、五年にはすでにあったことが確かだと語った。当時、糸は東京の西多商店、旭興さん、八王子の福井商店から仕入れ、店の者が自分で染めて売ったという。段染もまず白くさらし、ゴムを巻いて、黄色ならオーラミン、牡丹色ならローダミンで染め分けていった。京都から糸を取り寄せ出したのはどうやら戦後のことのようにだ。リリヤンの最盛期は昭和七、八年から十五、六年で、戦後になり少しまた流行したものの、それからは横這いといえるとのことだった。

◆ 白百合

伊藤秀文さんは、業界でこういう本が出ましてと、一冊の本を取り出した。それは全京都組紐連合会より出版された『京くみひも』というクロス装の本で、葉のひもが五色で織りなされたくみ

ひもであった。その本の第六章には、「リリーヤーン業界について」という項があり、リリーヤーンの名称のおこりが、池田兵三郎商店の自社の製品の登録商店名から広まったと書かれていた。

本の著者は、リリーヤーンの歴史を植村義三郎（明治二十六年生れ）さんに尋ね記しているが、それによると、大正の初め京都で初めてリリーヤーンを作り、それを「八千代」と呼んで市場に出したということである。「八千代」という名称は、一本の糸が丸く細くメリヤス編みされ、ほぐすとどこまでもほどける糸という意味でつけられた由。

なお著者は、別の意見として「小学館の大日本百科事典によると、リリーヤーン編糸をわが国で初めて作ったのは、大正一二年に京都であると記されている。」とつけ加えている。

伊藤商店が取引をしているのは、京都の植村さんであった。そこで、玩具のリリヤンのおこりをさぐる次の手がかりとして、植村さんに池田兵三郎商店の所在を問い合わせることにした。

その結果、東京日本橋馬喰町の、現在は旭興株式会社が池田商店とわかり、旭興株式会社をお尋ねして、七十歳になられる二代目の池田豊禎氏に、リリーヤーンの歴史を伺ってみた。それによると……

池田兵三郎商店は明治四十四年、父兵三郎（一八七四—一九

六九）が今ある馬喰町で創業。関東大震災があった大正十二年の末に、京都の猪飼さんという人が、父のところを訪れ、こんなひもができたが売ってくれないだろうかと持ってきた。メリヤス職人の猪飼さんが新しいひもの試みでいろいろいたずらをしている時にできあがった品らしい。そういうわけで、リリーヤーンの発案者は猪飼さんで、この人呼び、東京に工場を建てて生産にかかっていったと聞かされている。そして父が百合の花が好きなところから、その編み糸に登録商標リリー印をとり、リリー印の糸即ちリリーヤーン (Lily-yan) という名称で販売した。レットルに印刷されたリリー印は、百合の花が二つ重なった図案だった。

百科事典の大正十二年説は、池田さんの証言と一致する。先の植村説と池田説では、年代に少しい違いはあるが、発生地が京都のメリヤス工場ということは同じである。以前からメリヤスは三本の糸、八本の糸、十六本の糸と、何本かの糸で編まれ、太い編みひもが作られていた。しかし一本の糸でメリヤス編みされるようになった細いリリーヤーンのひもは、目方が軽くふっくらして、柔軟性に富んでいた。材料がかららず安くできることもあり、そのしなやかな風合を生かして、何かに利用できないかと考えられはじめた。このようにまずリリーヤーンができあがってか

ら、リリーヤーンを売るために、その利用方法をさがしたのであった。

時代はまさに大正末期から昭和にかけての、洋風文化が中流階層に浸透をみる頃であった。マクラメレース、フランス刺繍、文刺繍といふ種々の西欧手芸が、裁縫、押絵などにかわって、中流婦人の高雅な趣味として根づこうとしていた。これら手芸界の中に、しなやかにすべりこんでいったのがリリーヤーンであった。かたや東京で「リリーヤーン」と名づけられ、また、かたや京都で「八千代紐」と名づけられた編み糸——同じ編み糸につけられた二つの名ではあるが、時の人々は、「リリーヤーン」の音の響きをこそ受け入れたのであった。それは名にしおうリリーヤーンの、あえかにやさしき異国の響きゆえであつたらうか。

◆ピアノ

横浜の邦楽器工西川寅吉が、わが国第一号のピアノを完成させたのは明治二十年であった。続いて山葉寅楠が、そして大正から昭和にかけて、松本ピアノ、小野ピアノ、河合ピアノが創設され、たえなるピアノの響きを人々に贈りとどけ出した。芸術の魅力をいっばいに秘めたピアノは、都市の中流の家庭で、当時建てられ

出した文化住宅の応接間に凜然と置かれたのである。和風住宅に洋風の広間形式の応接間がついた文化住宅は、その応接間が玄関の横などに建てられ、赤や緑の色瓦のとんがり屋根がスツクと空にのび、出窓にはカーテンがなやかに垂れ下がっていた。

山の手郊外の黄昏時、半ば開かれた窓から洩れる、象牙の鍵盤からうち鳴らされるしらべは、まさに吉屋信子の少女小説の世界であつたらう。吉屋信子かの人は、この大正から昭和にかけての匂いやかな西欧文化の花々を、全国のうら若い少女に、とどけよとばかりに清き河面に浮かべた作家であつた。円本時代を迎え、新潮社の「現代小説全集」の一巻の印税をもとに、かの作家が憧れの国フランスへの旅路にあつた時、日本橋区若松町の、わが国における手芸専門店の先駆である三瀬商店では、一冊一円の円本をまねた、手芸の叢書を刊行する準備がととのえられていた。三瀬商店とは、碁の神様と謳われた兄・憲作を含めた瀬越三兄弟が「三瀬」と名づけ始めた店であつた。西欧手芸の流行に合わせ、手芸材料を専門に扱っていたこの店で、池田兵三郎商店のリリーヤーンも手芸用糸として大量に販売されていたのである。

リリーヤーンは、はじめ何に用いられる糸かわからずに作り出されたものの、そのふっくらした光沢のあるしなやかさは、マクラメレースの材料として盛んに用いられるようになっていく。こ

のような背景には、三瀬商店や手芸の先生方との連携が勿論考えられよう。三瀬商店が欧風手芸を紹介するわが国で初めての叢書『現代婦人手芸全集』を刊行し、手芸への案内・普及を試みたのは、その誠実で丁寧な営利をはなれた本作りとはいえ、手芸用品の売上げへの意図が全くなかったとはいえないであろう。

さてこの『現代婦人手芸全集』は、第一巻クレープペーパー篇（竜野都代子）、第三巻マクラメレース篇（河野富子）、第五巻毛糸編物篇（石藤寿子）、第六巻欧風刺繍篇（山脇敏子）の四冊しか、もとの本を確かめることができなかったが、それらは昭和三年四月から、三瀬商店出版部、発行者瀬越喜作の名で刊行されている。そして第三巻マクラメレース篇を見ると、リリヤーンがマクラメレースの材料として大いに用いられているのを発見することができる。このマクラメレースは、手芸玩具のリリヤーンとも関係が深いと思われるので、その本の序文を紹介して詳しくふれてみたいと思う。

著者河野富子氏は、マクラメレースがアラビアの昔に起源をもち、布地の縁を結んで飾りとした事から始まったとまず紹介している。次に「私は曾て英国に居た頃此のマクラメレースに注意を惹かれ、適當なる参考書を得て帰朝致し、爾來種々研究工夫を重ねつつ今日に及びましたが、此の度三瀬商店の婦人手芸全集発行

の美挙を賞し、不肖私が筆を執って自分の考案になる数十種のものを幾方の姉妹方に発表する機会を得ました事を深く喜ぶと同時に、読者諸姉が尚ほ一層の研究を積まれて最も勝れたる多くの製品を得られんことを切望する次第でございます。」と執筆の挨拶をしている。

そうして本文のはじめにおいて、マクラメレースに用いる糸は、「打紐の様な感じのする太い糸で、而もあまり撚よの強くない柔かみをもっている糸」がよいとして、たとえば太い麻糸、加工綿糸の撚糸、太白絹糸、人造絹糸の撚糸、リリヤーン、ピロド糸、毛糸を例に掲げている。しかし「リ、ーヤーンは廉価で得るに容易たやすく色数も沢山で自由に撰えぶことが出来ますから最も重宝で御座いませう。」とリリヤーンを特に推奨しており、マクラメレースはリリヤーンに限るような観を呈してゆく時代の前兆きざしをうかがわせている。

マクラメレースは編んでいくのに用具の準備がいくらか必要で、まず編用を用意して、レースピンで糸を固定しながら編んでいく。その点が、釘に糸をかけて編むおもちゃのリリヤーンと似通っている。従って、リリヤーンのおもちゃの商品化についても、もしや三瀬商店が大きく関連しているのではないかと想像された。しかし、三瀬商店はその後、全集の刊行があたり、経営が苦しく

なって倒産してしまっている。池田さんの話によると、丸武商店と名をかえ、債権者から逃れながら本は出したが、丸武商店もいつかなくなってしまうという。ここで、三瀬商店の関係者をたどる糸はブツツリ切れてしまった。

やがて無駄とは知りながら、瀬越という珍らしい名をかすかたよりもして、私の指は電話帳を繰っていた。そこに見い出されたのは東京でただ一人の瀬越姓——瀬越一治氏であった。失礼をも省みずお電話すると、ああ、瀬越憲作氏の長男の家という。

そしてそこから瀬越喜作氏が御健在であることを知った。宙にそよぎ舞った糸の緒を再びつかんだ心地がした。謎よ、どうか解けると祈る思いで瀬越喜作氏にお電話すると、氏は八十三歳の高齢、腰を悪くして十四年間も臥せっていらっしやるとのこと。用件をお伝えすると、取継の方も親切に伝えて下さったとみえ、ベッドの傍の電話の受話機を執って下され、寝ながらに、お話をし下された。老翁のおだやかなやさしい声が、胸に沁み透るかのように伝わってきた。

喜作氏のお話はまとめると次のようになる。

『現代婦人手芸全集』は全七冊で、本屋では売らずに、全国に手芸愛好者の会員を募り、会員三万五千人の人達に対して、毎月一

冊ずつ発行して送った。マクラメレース篇により、リリーヤーンは大いに売れ、池田兵三郎商店は大あたりをとった。この兵三郎氏はなかなかの人格者で、私はよくお世話になった。

子どもが使うニッチングは、大正末から昭和のはじめにかけ、三瀬商店で売っていた。しかし誰が考案したものか知らない。下町の木工所の職人が店にもってきたのを売った。ニッチングは当時、全国の手芸材料店で何十万個と売られていた。大・中・小の三種類の大きさがあり、棒が中空になったものに真鍮の針が五本、十本と打ちつけられた簡単なものだった。これにリリーヤーンをひっかけ、牛骨や竹でできた糸の編針で編んでいく。

三瀬とならび、東京には手芸材料店としては古くからもう一軒、出口佐市商店というのがあったが、その店でもニッチングを盛んに売っていた。

河野さんがマクラメといっしょに英国からもってきたものではないと思う。日本で作られたおもちゃではないだろうか。

瀬越さんは、ニッチングはあの時だけ流行^{はや}って、今ではもうなくなっているのではないかと言われる。手芸店で扱っていたが、それがいつのまにか、おもちゃ屋扱いになったことを知らないでいたらしい。瀬越さんはその後、シルバー編機の会社を創設さ

れ、実業家として華々しい活躍をされたようだ。池田さんはそれを御存知なかったというわけである。

さて、洋行帰りの河野富子氏はリリーヤーンを使って、帯止め、ネクタイ、ショール、バラソル、栗、タセルス(飾り房)、飾りボタン、マクラメ人形、クッションカバー、テーブルセンター、ランブシェード、壁掛などの作り方を紹介している。まさに洋服に似つかわしい装身具、また応接間を飾るのにふさわしい品々である。当時の婦人たちにとって、家居がちなる日々に、絨毯が敷かれ、ピアノが置かれた広間で、マクラメレースに勢を出すことは、どんなにか異国の香気をかぐことであつたらうか。「マクラメ」というフランス語は、心うち震える不思議の四音節にはちがいがなかつたであろう。

◆糸巻

昭和初期に子ども時代を過ぎた方が、友だちとの幼気な喧嘩で「あなたのうち、応接間がないじゃないの」とやり、それを耳にされたお母さまにいたくたしなめられた思い出を語られた。洋風文化を我家に導き入れていたのは、子ども心にも得意気なこ

とだったのが偲ばれるが、当時、応接間のある文化住宅のほか、文化鍋、文化包丁、文化刺繍と、「文化」の名のもとに、洗練された美をもち、それに加えて機能的にも優れているとされた品々が、中流の家庭の中に多く取り込まれていた。まさに「文化」の名こそは、人々の中流意識を刺戟するものだったらしい。

文化刺繍は、欧州で創始され、アメリカに渡り、大衆手芸として行なわれていたものだが、昭和の初期に藤崎豊治がわが国に伝え、広く普及に努めた。この文化刺繍に用いる糸は文化ヤーンと称し、やはり当時多く出回っていたリリーヤーンを用いた。リリーヤーンをほぐすと、メリヤス編みの縮みがあつて弾力性に富んだ糸となる。この糸の縮みを利用して、これ又文化刺繍針という特殊な刺繍針で布地の上から刺したり抜いたりして刺繍をしている。比較的単純な動作で、フランス刺繍などより速く作品ができるため、今に至るまで長く人々に愛されてきている手芸である。マクラメレースがリリーヤーンで作られる流行が過ぎても、文化刺繍はこのリリーヤーンの糸でしかできないこともあり、リリーヤーンの全生産の三十%が、文化刺繍用の糸になっている。玩具のリリヤーンと文化ヤーンの糸を比べると、おもちゃ用は二百番手で目が荒く目方も軽く、それに対して手芸用は、目がまつて二百五十番手だという。また色数も文化ヤーンは四十色と多

くなっている。

尚、リリーヤンの名称は池田兵三郎商店一社の商品名であったが、あまりに広く名が通ってしまった為、昭和二十五年から池田氏の諒解のもと業界の統一商品名として用いることになった。

さておもちゃのリリヤンが、マクラメレースと深いつながりがあることは、この製品がそのはじめ、手芸材料店を通して売られ、後になって、おもちゃ屋で売られたことから推察される。又、「ニッチング」と呼ぶことから、私には日本で創り出された

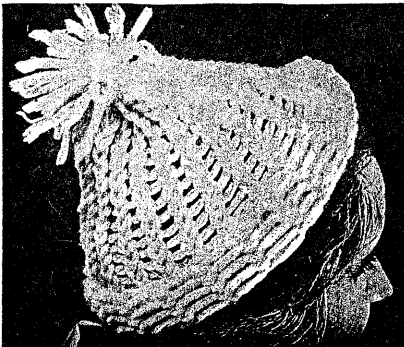
ものとは思われにくく、やはり、英国あたりから手芸（特にマクラメレース）と共に入ってきたのではないかと考えられた。そこで何はともあれ、次はイギリスのマクラメに関する本を調べてみることにした。そして見つけた一冊の本に、次のような帽子の作品例が載っていたのだ。

著者A・N・ピルシャーさんは、この帽子を図のようなワクを用いて編むと紹介しており、それは全くリリヤンそのもので、ただ毛糸で円く大きく編んでいくにすぎない。そして著者は、この作品の作り方の説明に先だち、「これは、子どもの時によく遊んだ、木綿糸の糸巻に四本のツメを打ちつけたものの応用である。それはまたヘドリー・ダウン・ザ・リール (Dolly Down The

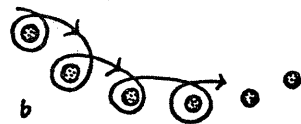
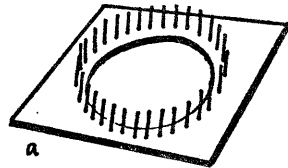
Reel) の名で知られている。」と書いている。

マクラメの本の中に、リリヤンのおもちゃを応用したこの帽子を発見したときの驚きそして嬉しさよ——（読者の方よ、御想像あれ！）

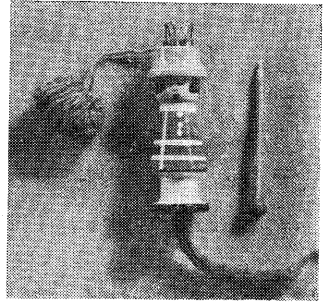
そこでイギリスのケンブリッジに在住している知人長島淑子さんに手紙を書き、そのドリー・ダウン・ザ・リールがどのようなもので、今でも子どもたちに遊ばれているのかどうかなど、おもちゃ屋を廻り、英国の婦人の方にも尋ねてくれるよう面倒な探索を頼みこんだ。その返事による



〈フレンチ・ニッチング〉ハット



〈フレンチ・ニッチング〉フレームと毛糸のかけ方



イギリスで〈Knitter〉、
〈Knitting Dolly〉、〈Knitting
Nancy〉と呼ばれている
おもちゃ。

と、おもちゃ屋で〈Knitter〉、〈Knitting Dolly〉、〈Knitting Nancy〉と呼ばれて、四本のツメが打ちつけられた、人形の形をしたものが売られているということであった。これで〈Dolly〉は、握り手が人形になっているところからつけられた名とわかった。尋ねた人の中では〈Dolly Down The Road〉という呼び方は知らないということであったが、イギリスでも各地方により、いろいろな名前がつけられていると推測される。

また長島さんの報告によると、手芸品店の女店員（四〇歳台）の人や、二十八歳の女の友人が、昔、子どもの頃、お店で買わずに、木の糸巻に釘を打ちつけて作り、編んだ記憶があると話していたことを伝えていた。

ビルンジャーさんは、帽子を編むワクを「フレンチ・ニットイン

グ・フレーム」と呼び、その道具によって編み上げた帽子を「フレンチ・ニットイング・ハット」と呼んでいるところから、マクラメの手芸がフランスからイギリスにもたらされたように、この遊びもフランス起源かもしれないと思われ、そのことも尋ねてもらった。すると〈Knitting Dolly〉をフレンチニットイングと呼ぶが、フランスからきたものかどうかはわからない、ただそう呼ぶという答えが返ってきたという。

以上のように起源がどこの国のものかはわかりかねるが、イギリスにおいてそのはじまりは、糸巻に釘を打ちつけ、先のがった木の棒を編み針として、毛糸をかけて編んでいたのである。この英国にあった糸巻のおもちゃ〈Knitter〉をもち帰り商品化したのは誰だったのであろうか。謎はあくまで神祕の輪をめぐらし、謎として残った。

日本保育学会第33回大会

期日 昭和55年5月17日(土)、18日(日)

会場 西南女学院短期大学

連絡先 北九州市小倉北区井堀一―三二―

西南女学院短期大学

『自発活動を育てる環境づくり』

——幼年期のオープン・ラーニングのために——』

バーバラ・デー 著

教育出版

森上史郎・江波諄子共訳

視するということを強調している。確かに、オープン学習というと、教室の壁が取り払われているとか、学年がないという形態面だけが強調されがちである。

さて具体的場所作りの例をいくつか紹介してみたい。「芸術的創造活動」の章の中に、足を使ったペインティングがある。これは雰囲気の違いレコードをかけ、子どもが溶かした絵具を足の裏につけ、紙の上を歩いたり、つま先で歩いたりするわけである。これなどは日本人の足に対するイメージとか、比較的管理傾向の多い日本の幼児教育環境からは発見されにくい遊びではなからうか。もし試そうとすれば勇気がいりそうである。

次に「戸外での遊び」の章の中に生木を利用したり、製材された木材を使ったり、つまり木で作られた大きな教具をみる事が出来る。これらの教具は大きく

ノースカロライナ大学のバーバラ・デーの「OPEN LEARNING IN EARLY CHILDHOOD」の訳本で、五歳から八歳までの子どものオープン学習を促す環境作りについて書かれたものである。

全体は十三章から成っているが大きくは二つに分かれ、一章において、オープン学習を行なうにあたっての考え方が述べられ、二章以降はオープン学習の具体的な場面の作り方の例が、「積木」・「砂遊びと水遊び」・「戸外での遊び」・「芸術的創作活動」というような形で一章ごとに細かく取り上げられている。

オープン学習は、旧態の学校問題に対する疑問から、より効果のある、しかも楽しく、わくわくするような学習の為に環境作りを目指していく過程で考えられてきたようである。それは子どもに対して柔軟に教育のあり方を変えていく試みであり、一人／＼の子どもの興味や要求・課題意識・挑戦目標などを考えながら、子どもに即して環境・形態を変えていくこととするものである。しかしそれは一つの組織化されたパターンや特定の指導方法ではなく、むしろひとつの思想だということ、また基本に子どもの主体性を重

立体的で、色々活動的動きができると同時にこじんまりした動きもとれるようにもできている。例えば部屋や家として使うことができると同時に、すべり台として、鬼ごっこの障害物として、跳躍台等として使うこともできるのである。プラスチックや鉄製の教具が多い現在、たと

え子どもがそれらで遊んでいても何か教具と子どもとの間に距離を感じるのではあるが、木製の教具は一体感を感じさせるのである。次に、とっ組み合いというものがある。たまたま子ども達がとっ組み合いになったら私達はどうか対応するであろうか。「ヤメナサイ、」というであろうか。それとも怪我がない限り見ているであろうか、ここでは子ども達にスローモーションで戦わせてみることを勧めている。光景が目には浮ぶようである。

「ホームリビング」の章の中には裁縫・

料理がある。勿論子ども達ができる程度のものであるが、教師側にあらゆる面においての余裕がないとむづかしい感じ、十五人、二十人それ以上の子ども達に一人の教師が一斉に働きかける保育形態をもってしては不可能であろう。

特別目新しい教材・材料が紹介されているのではない。むしろ、どこかの会社が作ったものというのではなく親や教師が手作りで作り上げた物や日用品の利用が多く、大人と子どもと一緒に生活を経験し、作り上げ、その過程で多くのものを学んでいく様子がうかがえるのである。どちらかといえば幼児教育のみならず、教育というものが、大人側から一方的に子ども側へ教え込むという形でなされていくことの多い昨今、子どもの創造性を促し、自主性を重視したいと考える

時、むしろ教師側の自発性や創造性が問われていることに気付かされるのである。まずは教師側の閉鎖的、固定的考えをオープンにする必要があるであろう。また実に細かく、具体的に場面・環境作りが述べられているが、これらはいくまでも参考であり、子どもと出会った教師がいかにその子どもに合った教材を作り、それを利用し教育環境を作っていくことができるかが問題であろう。

最後にこの本の中で引用されているバーナード・スポデクの言葉より、

「それがどのように斬新なものであっても、その環境や組織・形態・方法などが固定化した時には、生命は失われ無意味なものになる」と。

現在の幼児教育界がまさに必要としている書物であると思う。

(日本総合愛育研究所 松沢孝博)

遊びと子ども の 発達 ④

加古里子

(続・歩行跳躍疾走の遊び)

子どもの「歩行跳躍疾走」能力獲得修練の場として「鬼ごっこ」の遊びを紹介したが、それらは次の各種に大別される。

〈鬼の変化〉

一般的基準型の「鬼ごっこ」は「おいかけ鬼」と称せられるもので、一人の鬼が子をおいかけて、捕えたならその子と鬼が交替し追逃を続けるものである。しかし鬼の交替をせず次第に鬼をふやしてゆくのを「ため鬼」と呼ぶ。この「ため鬼」は鬼が夫々自由に子を追うのであるが「二人鬼」「三人鬼」「……」等は鬼が互に手を連ね追うもので、従って「結び鬼」とか「はしご鬼」と総称される。これらの鬼の列は、両端の片手のみが子を捕えることができるが、「ゲジゲジ鬼」は腰、又は肩に手をかけて列をつく

り、その先頭者の両手だけが捕えることができるものである。また子を捕えるのでなく、追いついてすばやく列の中に追いこみ連手の輪の中にかこうことで捕獲を成就する「かこみ鬼」というものがある。

鬼の列が四人以上となれば、二人二人の鬼群に分かれてゆく「子ふやし鬼」というものがある。以上の方法のうち「ため鬼」「子ふやし鬼」以外は、よく考えたと鬼の自由行動は束縛制限されていることがわかるであろう。

〈子の変化〉

一方逃げる子群の自由行動力を制限する様な方法がある「手つなぎ鬼」或いは「くみ鬼」とよばれるものは少くとも二人以上

が互に手を連ねて逃げるものがあり、その最たるものは全頁が連手した「むかで鬼」というものである。又「三角鬼」「四角鬼」は連手の輪を形成して逃げるもので、「うでくみ鬼」は連手でない腕をくむもので、「片手鬼」は片手しか自由に振ってはいけないもの、「手あげ鬼」はどちらか一方の手をあげながら逃げるもの、「あたま鬼」「背中鬼」はそれぞれ手をそれぞれの所において逃げるもので、「ぎす鬼」は鬼の言う箇所をおさえて逃げるものである。(所によるとこの時、鬼の方もそこをおさえて追う方法がある)更に二人以上が肩をくんでにげる「肩くみ鬼」、その足をひもや手拭で結びあう「足むすび鬼」、その中には「二人三脚」や「三人四脚」となるものがある。

〈鬼と子両者の変化〉

前記した各種の方法は、単に鬼又は子のみが行なうのではなく、「ぎす鬼」でふれた如く両者共にその方法で追逃する変化となつてゆく。そうしたものとしては「片足鬼」「うしろにげ鬼」「かえる鬼」(足首に両手をふれてとぶ)、「うさぎ鬼」(両足をそろえてとぶ)、「スキップ鬼」はそれぞれの体型や疾走法で追逃を行うもので、「耳とり鬼」(右又は左手で左又は右の耳をつまみつつ追逃する)、「片目鬼」(片目をおおう)、「鼻つまみ鬼」などという

ものもこの類に入れられる。

一方「おんぶ鬼」は二人ずつが組となり、一人を背おって追逃するもので、「うま鬼」は一方が一人の腰に組む形をするもの、「ろば鬼」はその頭の者がうしろむぎとなるもの、「みみず鬼」は二人以上が腰につらなるものである。

〈捕獲法の変化〉

こうした鬼の子を捕える法にいろいろ工夫されたものがある。一般的には「さわり鬼」又は「タッチ鬼」というのが通常形であるが「うしろ鬼」「背中鬼」「右手鬼」「首すじ鬼」はそれぞれのさわるべき箇所を指定したものである。一方「たたき鬼」は、はっきりとたたき事が必要で「尻たたき鬼」「背中たたき鬼」「手首しっぺ鬼」は夫々の位置をたたかなければならない。また前述「手つなぎ鬼」で逃げる子の連手の所を鬼がたたく、「手切り鬼」では、切られた両方の者がジャンケンで次の鬼を定め、残った者は元の鬼と組んで逃げる事となる。

逃げ手が鬼につかまる時、一時タイムを要求するものに「しゃがみ鬼」「手つき鬼」「うでくみ鬼」「オンブ鬼」「背中合せ鬼」がある。もっと積極的な逃げ手の方法として、他の逃げ手を助う「よこぎり鬼」「手助け鬼」(リレー鬼ともいう)「鬼たたき鬼」が

あり、「名のり鬼」は自らが追われる事を宣言するものである。

〈道具を使うもの〉

追逃の方法にいろいろな道具や部品を利用するものがある。

「つな鬼」は逃げ手がつなに連なるもので、前述した「手つなぎ鬼」の延長である。「つなひき鬼」はため鬼が一本のつなに群がって追う際、子はそのつなを引っぱる等のからかいかいを行なうもので、一般的にこうした鬼に対する挑発行為を伴うものを「からかい鬼」と称する。鬼のうち的一方がつなを腰に結び追ひ、一方がつなの端をもつものを「さる鬼」、立木などにつなの端を結び、子は「からかい鬼」をするものを「牛鬼」という。みじかいつなやひもを子の腰につけ、それを鬼がとる「しっぽとり鬼」、長くのばした地上のしっぽをふみつけてとる「しっぽふみ鬼」、或は「ハチマキとり鬼」「帽子とり鬼」の他その頭に附したススキの穂などをとる「穂ぬき鬼」又は「すすき鬼」がある。

〈場の変化〉

遊びを展開する場はいつも平坦広域の場とは限らない。そのいろいろとちがった場に対応しての変化として「立木鬼」というのがある。一時タイムを確保する場として、立木にさわれば鬼の追

求からまぬかれるもので「柱鬼」ともよばれる。その立木でなくそれぞれの材料、物質の所だけにさわったり、つたって行なうものに「鉄鬼」⁽⁶⁾、「石鬼」「土鬼」「草鬼」というものがある。こうした中で鬼の位置より必ず高い所に位置する事が要求される「高鬼」とか、鬼が近づいた時ぶら下れば一時タイムとなる「ぶらさがり鬼」などは、何れも林や大木の場で、木のぼりをしている時に行なわれる。

更に川やプールで行なわれる「およぎ鬼」のうち「もぐり鬼」や「しずめ鬼」「水かけ鬼」中には「へそとり鬼」というのがある。氷上にあつては「スケート鬼」又は「すべり鬼」があり、雪中では「雪鬼」「ぶつつけ鬼」そして雪原につくった図形足跡で、次回に述べる様々な図形の遊びが行なわれる。(この項続く)

引用文献

- (1) 中島海「遊戯大事典」不昧堂出版(昭32)
- (2) 角田巖「おにこっこ」ささら書房(昭50)
- (3) 加古里子「愛媛児童遊戯採集」(未発表)
- (4) 野沢要助他「図解鬼遊び」東洋館出版(昭54)
- (5) 伝承遊びの会「こどもの遊びの四季」北日本新聞社(昭50)
- (6) 橋本昌雄他「福岡伝承遊び」子どもの遊び研究会(昭43)

保育の体験と思索

——子どもの世界の探求(三十三)——



津 守 真

五歳児三学期

それぞれの子どもが自分のしようと思うことを持ち、それをするのできる保育

一月十六日

五歳児の最終の学期である。

朝、私は附属幼稚園にゆくとすぐに、Sが傍にくる。昨年終りに私にあずけたセロテープのボールのことをたずねる。これはSがセロテープを固く貼り合わせて作った球状のボールである。

Sはそのことを忘れないでいた。

室内で、Iがおいも売りとかじびきの店をやっていて私をよぶ。おいもは紙をまるめて包んだものである。お金を払わないとおいもを売ってくれないので、私は机に坐って十円玉をつくる。それとひきかえにおいもをもらおうと、細長い紙に1から9までの数字がかいてあるくじびきをひかせてくれる。数字を選ぶと、裏側に○と×が書いてあり、○だと箱に手をいれて小さな紙片を取り出す。それにまた○と×がかいてあり、○だとおいもをくれる。私は机の上でお金を作っていると、いろいろの子どもが次々にお金をもらいにくる。私はお年玉だと云ってお金を作ってやる

と、「お年玉ちょうだい」と云つて、何度も次々にお金をもらいにくる。こうしてくじびきの店が繁昌する。

くじびきの交換あそびは随分長く続いた。単純な交換作業である。しかし、一時は繁昌したくじびきも、いつのまにか人がいなくなつてしまった。それぞれ違う遊びに向つていったのである。

Mくんが庭から入つてきて、H先生に、そこに出つていたダンボール箱を使つていいかとたずねる。それには何かが入つていたので、H先生は別の同大のダンボール箱を出してきてMくんに与える。Mくんは、ダンボール箱の一方に出入口をつけ、他の面に窓口と十円入れ口をつけて、自分はダンボール箱の中にはいる。外から10円をいれると、窓口から何かがとび出してくる仕掛である。次々に子どもたちがきて、10円をいれてゆく。Mくんはダンボール箱の中に入ったまま、ほとんど出てこない。

この間、Kは私の膝に腰かけて、ずつとお金つくりをしていった。同じ机のわきで、Uは熱心に飛行機を作つていた。

間もなく私は庭に出て、たかおにをすることになった。これで殆ど午前中は終つて、昼のお弁当になる。弁当のとき、Nは机のはしを私のためにあけて待つてゐる。

それぞれの子どもが、自分がしようと思つてゐるのを

見ることができるとき、おとなは心の奥に満足を感じるのではないだろうか。しようと思つてゐること、あたりまえのように見えるが、子どもをそういう状態に維持するのはむづかしいことなのである。ここに掲げた五歳児三学期の記録は、とり上げるに足りない小さなことばかりのようであるけれども、それぞれの子どもが、自分がしようと思つてゐることを持ち、それをしていくという点で、保育の一つの典型である。ここに記してあるのは、この日にこのクラスで起つていたことの一部分であるにすぎない。ここに見えていないところでも、子どもたちはそれぞれ自分の思うことをして遊んでいたのであることは疑いない。私は、私の周囲の子どもたちとの間で、その求めに応じて行動し、その子どもたちが自分の世界を展開するのに支え手とならうとしていく。その私をも含めてクラス全体の担任の保育者は、クラスの皆がそれぞれ思うところを実現するように、心を配つて保育してゐる。

この日の記録でも、Mくんが庭から入つてきて、担任の先生に、そこに出つていたダンボール箱を使いたい意志を表明する。それが何に使われようとしているのかは先生には分らない。しかし、Mくんがそう思い始めたことを何とか実現させてやろうと、先生は別のダンボール箱を出してやる。実際、私は傍にいて、私

だったら、このとっきの間に、素直にこのように応じることができたろうかと自分自身に対して反省をしていたのである。このあとのMくんの遊びを見ると、そのダンボール箱の薄暗い中に入って、お金と交換にいろいろの物を窓口から出す交換遊びを長い時間やっていた。Mくんは、このシリーズで、三歳児のはじめから、何度も登場してきた。ときにはめを外しがちな元気の良い男児である。五歳児になってから、小さな女の子とも対等に遊ぶことが見られるようになってきた。そしていま、このダンボール箱の窓口を通して、クラスの子どものとも交わっている。ダンボール箱という小さなきっかけから、この子どもにとって重要な体験が生れている。

この日の午前の遊びには、面白いことがまだいくつもある。くじびき遊びのIは、四歳児から入った子どもで、入園当初には、字を書いたり、三角や四角を書いて得意になっていた。その子どもが砂遊びに熱中し、形をくずすようになる過程については、このシリーズで取り上げた。(第七十六巻第十二号)長い間、屋外の遊びが多かったこの子どもが、五歳の後半には室内で遊ぶ。そしてこの日の室内の遊びは、くじびきという友だちを相手にする知的な活動である。この子どもの知的関心は、いまや、他の諸面とのバランスをもって育ってきているのを見ることができている。

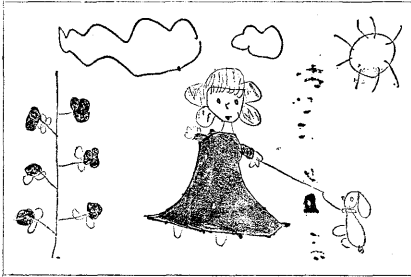
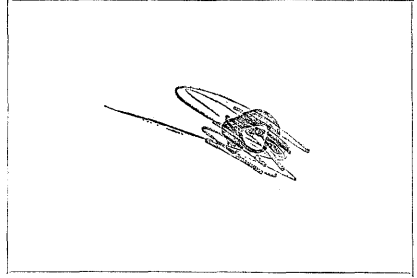
五歳児の三学期、それまでの二年、三年を幼稚園で過してきた幼児たちは、それぞれに充実した興味深い姿を見せてくれる。三学期の幼稚園の生活の中から、そのような姿をもう少し拾ってみることにする。

実のなる木の描画

一月二十三日

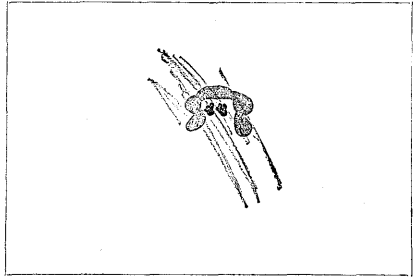
女兒のZとOと、もう一人の女兒と三人が一つの机でえをかいている。私も同じ机で紙をいじっている。Zはかきかけてその上をマジックの往復線でけし、「あげる」といって私にくれる。次の画用紙も同じように女の子の顔をかきかけて、マジックの往復線でけし、私にくれる。こうして、四枚つづけてかきかけてはけして私にくれる。(写真1、2) Oは自分のえをかきながら、「けさないでやったら」「またけしてある」などという。そのうちにZは次の画用紙にかきはじめ、私に目をつぶっているようにいう。できると、それを私にくれる。それが写真3である。両手をひろげた女の子が、犬を引張っている。洋服は赤いマジックでぬりつぶしてある。画面左には、一本の木が描かれ、両側に出た

写真1▶



▲写真3

写真2▶



枝の先には木の実がついており、赤いマジックで丸くぬってある。空には雲とお日さまが描かれている。画用紙の裏には、「おじさん」と字がかかっている。

Zはこれまでも、しばしば私のところにベタベタとくっついてきた子どもで、何か屈たくありげであった。私はしばしば、この子に寄りかかれるとき、重たく感じていた。この日も、最初、女の子の顔をかきかけてはマジックでぬりつぶしたのは、自分の心に描いている理想像と一致せず、気に入らなかったのだろう。そして最後にかいたのは、いつものZが描いたものとは思えないような、堂々とした女の子であった。ひもをつけて引張っている犬は、このように開花する以前の動物に近いZの姿と見てもよいのではないかと思う。画面の左側に描かれた直立した木は、両側に枝が張り、枝の先には赤い実がついている。これでZは満足した。最初、Zが描きたいと思っていたのは、こういう堂々とした女の子の姿であり、赤い実を結はせるイメージであったことがわかる。これをかき終ったときのZは、私には、いつもの何かすねたような表情ではなくて、この絵のような堂々とした女の子に見えた。

「実のなる木」は、児童画の研究の中に、洋の東西を問わず、しばしばあらわれるテーマである。たとえば、エングの有名な児童画の研究の中で、マルガレエテは六歳五カ月のときに、樹木の枝に沢山の赤い実のなる木を描いている。(ヘルガ・エング 外山卯三郎訳「児童画の心理」暁教育図書 昭33) また、エングは、児童画研究の古典であるケルシュンシュタイナーを引用して、樹木の描画の一形式として、羽根状に出た枝の先に果樹のつけられたものを挙げている。丁度ここに掲げた写真3と同様の画である。また、ケログの描画のコレクションの中にも、分枝した枝に円形の実のつけられた例(5—7歳)がいくつもある。(R. Kellog, Analyzing Children's Art, 1969) 私が見た日本の子ども描画にも、実のなる木は多くあるし、その中にあるものは、明らかに子ども自身がある充実した段階に達したときに描かれている。子どもが実のなる木を描くとき、まずはっきりした垂直線を描き、その両側に上昇方向の放射線の枝を描く。その線の性質だけからみても、高揚と安定を感じさせられる。更にその枝の先につけられた円形と、赤い色には華やかな気分がある。線の性質を見るだけでなく、これを描くときの子どもの内面の状態を察してみるので、子どもの中には赤い実のなる木が思い浮べられているのである。冬でも赤い実をつける青木の実は、子どもの目を容易にひ

きつけるものである。ある期間をへて、木が実を結ぶことを、子どもは知識としてではなく、時間的経過の体験として持っているのではないだろうか、そこで成熟のイメージが木の实と結びついてあらわれるのではなからうか。この日にZが描いた実のなる木には、この日のこれに先立つ数枚の未完の描画の結実としての意味と、それからまた、二年間の幼稚園の生活の中で、次第に自分で遊べるようになってきたZ自身の心の中に貯えられてきた成熟の感覚とがあらわれているように思われる。

ここでもう一つ興味深いことは、傍にいた女兒Oが、「けさないでやったら」「またけしてある」などと、Zのえに対して批判していることである。たいがいの場合、子どもは他の子どもの描いたものを見たときに、どんなものでも、感心して見る人が多いように思う。子どもは外面だけから見るとはなく、描くときの感情や内面を見ているのであろう。自分も共に描くものとしての共感が根底にあるのだろう。ところがここでは、Oはけさないでかくのがよいという明瞭な規準をもって、描かれた結果を外面から見て批判している。これは五歳の三学期ころになると、おとなの目が子どもの中に作られることを示している。社会的にはおとなの規準に沿ったしつけのよい子どもかもしれないが、そのた

めに子どもらしい素材さを失いつつあるのではないかを恐れる。

がま蛙

三月十日

朝、園庭で、男児Tはしゃがんでがま蛙を見ている。私も一緒にしゃがんでみる。Tはがま蛙を手にしたがりしている。がま蛙は庭をはねてゆく。Tと男児五人ががま蛙を追って、同じような恰好をしてはねてとんで歩く、その姿がいかに面白い。川の流れの傍にゆくと、子どもたちはがま蛙を水たまりにいれる。がま蛙は、はって出てくる。するとまた水にいれる。がま蛙はSの方にはってくる。N「やっぱり、Sくんが好きなんだよな」S（まんざらでもなさそうにいう）「これ土がえるだよ。水蛙もあるよ。両蛙。土がえるだから、水の中に入れるんじゃないよ」子どもたちは、蛙を水にいれたり出したりする。蛙は崖をはって上ってゆく。何人かの子どもたちは崖の上について見る。Nが「もったい人のもっていいよ」というと、Tはがま蛙を手にしたがり庭の中央にくる。女児Mがくる。Tは「こわくないよ、さわらせてあげようか」と差し出すと、Mは「イヤー」といって逃げる。こうして蛙とのあそびが続く。

子どもたちは、庭にしゃがんでじっとがま蛙をみつめ、蛙がとびはねて歩くと、同じような恰好をして跳んで歩く。それは子どもが蛙に興味をもってその跳び方をまねているというだけではない。蛙の生活に自分と共通のものを見出し、おとなからは見えない子ども達の想像の世界の中で、がま蛙になっているのではないだろうが、蛙は水の中に入れても平気だし、水から出して土の上におくこともできる。水から出せば死んでしまう魚とは違うし、水の中にいれることができない虫とも違う。蛙は水の中と水の外と両方の世界で生きていることを子どもはよく承知している。そのことは、ここに掲げた、蛙との子どもの遊びや会話にもあらわれている。水の中は守られた世界とすれば、水の外は冒険してどこまでも歩いてゆくことのできる外の世界である。子ども自身の中にも、守られた空間に安住する気持と、未知の世界に一人で出てゆこうとする冒険心とが共存して、揺れ動いている。相反する両極の間に生きることは、人間の宿命のようなものでもあり、心のどこかにそのことが感得される時、人は両極の世界に棲む蛙に共感するのであろう。両棲類は、体の表面も液体と固体の両方を感ぜさせ、そのぬめぬめした感触が人の共感をも誘うし、また、嫌悪感をも生む。がま蛙を掌の上のせて愛玩する子どもと、見

るだけで立ちすくむ子どももあり、それぞれの個性である。

私は伊勢の二見ヶ浦に何度もいったことがある。海の中に立つ夫婦岩は日の出を拝む場所として有名であるが、その二見神社には、海に面した岩の上にも、山腹の洞の中にも、大小さまざまな蛙の彫物がある。青く広がる海の上に昇る日の出と蛙とは対照的なもの思われる。けれども、暗い夜が明けて日の出を見るときには、明るさのみに気を奪われるのでなく、明暗両方の世界に仕むのが人間であることを気付かされ、ここがま蛙の彫物を置いたのは、昔の人の心の自然な動きであったのだと思う。

その蛙の目は上方を向いている。暗い泥水の中に身を沈めながらも、目は陸上の世界を観察しているのが蛙である。これはまた、栄光の中だけに生きるのはない平凡な人間の生きる姿を象徴するものでもある。その蛙は陸の上を歩くと、ぶざまにびんびんと跳んで歩く。蛙とすれば精一杯に天空に高くとび上る努力と見ることもできる。しかし外から見れば、恰好のわらいとび方である。これは平凡な人間の生きる姿そのものである。子どもたちは、そのがま蛙の跳び方をまねて、とんで歩く。

蛙については、昔からの物語や風俗などを調べれば、いろいろの見方をするができるだろうし、子どものことを考えるのに面白い材料を提供してくれるだろうと思う。私はそのいずれか

の解釈を子どもの行動にあてはめて考えようとしているわけではない。しかし、子どもがそれほどまでにこの小さな生きものに對して抱いている強い関心を見るときに、蛙の生活の仕方の性質が子どもの内面に訴えるものがあるのだろうと思うのである。蛙を特別に好む子どもも多いので、それは何故であるのか、まだいろいろと考えてゆくことは多くある。

五歳児三学期、幼稚園の生活も終ろうとするこの時期に、子どもたちが長い時間蛙を相手に遊んでいるところに立ち会うことができよかつたと私は思う。これからも記すように、五歳児の三学期は、幼児期の頂点に達したことを思わせられる事実に出会うことの多い時期である。しかし、そこに至るには、いくつも暗い時期があった。そしてこれから小学校の時期を迎えるに当って、未知の不安が多くある。いつも光に照された陸上を歩くとは限らない。陽の当たらない泥水の中をはいまわることも多いであろう。この明るい時期を喜びをもって受けるのであるけれども、おとなの思いに沿わない混沌の時期があることを当然のことと想っていないければならない。人生の次のステップへと子どもを送り出すに当って、おとなとして認識することのできる人間の発達の両面性である。

(つづく)

十六世紀の人文主義哲学者として知られているエラスムスの著書『痴愚神礼讃』は、人間だれもが持っている愚かさには痴愚神の名を与えて、狂気の中にある世相を諷刺して語らせているが、その中に子どものことを記している個処がある。

「私たちが幼児をかわいがり、接吻してやったり愛撫してやったりするのも、仇敵でも幼児ならば助けてやったりするのも、幼児たちのなかに痴愚女神の魅力が備わっているためではないでしょうかしら？ 注意深い自然は、生れたての嬰兒にこういう魅力を与えて、嬰兒を育てる人々の苦勞を樂しきでつぐなえるようにし、おとなたちの保護をまんと手に入られるようにしているのです。」(世界の名著、第17巻 中央公論社 p.69) 赤ん坊や幼児の中にある愚かさの故に、おとなは子どもを可愛がり、保護してやろうという氣を起すのだという考えは、随分むかしから指摘されていることが分

って面白い。實際、幼児がおとなのような分別を備えていたら、おとなは幼児をかわいらしく思わないだろう。子どもにふれるときには、おとなも愚かなものゝ如くなるのができ、そのとき、何か本当の人間らしさを取りもどせるような氣がするのではないだろうか。世の中が知者ばかりになったら、全く窮屈で息がつけなくなってしまうだろう。また、戦争もたえないだろう。愚者の存在というのは、われわれの住む世の中にとって、實にたいせつなことなのだと思う。エラスムスは縦横に古人の言を引用してこのことを云う。「賢さが少なければ少いほど、それにつれていよいよ幸いとなる」(ソポクレス)「ただ痴愚のみが、のがれ去る青春をひきとめ、いまわしい老衰を退却せしめる」(格言)「知識が加われれば苦しみも増し、知恵を増す者は怒りを増す」(ソロモン)「神は世間の目に愚かなる者を選び」(パウロ)等々。(津守)

幼児の教育 第七十九巻 第四号

四月号 © 定価二五〇円

昭和五十五年 三月二十五日 印刷
昭和五十五年 四月 一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行人

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

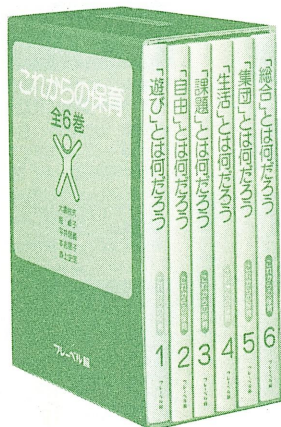
振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いいたします

好評発売中!!

これからの保育 全6巻

大場牧夫 海 卓子 平井信義 本吉圓子 森上史朗 共著



A5 軽装判・各256頁・セットケース入り

セット価格(全6巻) 9,600円

平易な文章で語りかける全6巻。保育の実際例や座談会などが豊富に入っていて、読みやすさ抜群です。

若い先生も、ベテランの先生も、原点に立つてもう一度“保育”を考え、基本的な問題を考えるために必読の書です。

内 容 一 覧

第1巻 〈これからの保育1〉

「遊び」とは何だろう

- 1章 遊び遊びというけれど
 - 2章 遊び・学習・仕事・労働
 - 3章 お遊びと遊びのちがい
 - 4章 遊びに課題は不要?
 - 5章 遊びと生活環境
 - 6章 遊びを育てる保育者
- (付録) フレーベルのとらえた遊びとは

第2巻 〈これからの保育2〉

「自由」とは何だろう

- 1章 保育者の好きな自由ということば
- 2章 自由という名の不自由保育
- 3章 くさりにつながれた子どもたち
- 4章 自由についてもう一度
- 5章 子どもの発達をみつめながら
- 6章 遊びの中の自由とは

第3巻 〈これからの保育3〉

「課題」とは何だろう

- 1章 課題について考えよう
- 2章 大きな課題と小さな課題
- 3章 子どもは課題をどう受けとめるか
- 4章 遊びから課題、課題から遊びへ
- 5章 大切な家庭との連携プレー
- 6章 受身にさせない課題の与え方
- 7章 子どもの生活の中から

第4巻 〈これからの保育4〉

「生活」とは何だろう

- 1章 子どもたちの生活をもつめる
- 2章 園も生活の場所
- 3章 子どものための子どもの生活
- 4章 子どもの生活をつくるために
- 5章 感動ある生活を求めて
- 6章 園・家庭・地域そして生活
- 7章 保育者の生活感

第5巻 〈これからの保育5〉

「集団」とは何だろう

- 1章 個と集団について考えよう
- 2章 園という集団の中で
- 3章 まず、個からはじめよう
- 4章 型にはめない集団づくり
- 5章 問題児というレッテル
- 6章 問題児を生む保育者

第6巻 〈これからの保育6〉

「総合」とは何だろう

- 1章 総合のとらえ方、考え方
- 2章 総合活動と子どもの要求
- 3章 広がり、深まり、まとめり
- 4章 総合のとらえ方とカリキュラム
- 5章 保育中の総合活動
- 6章 系統と発達のすじみち
- 7章 保育の流れと系統性

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・特約店または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

大きく伸びゆく お子さまのために…
フレーベル館の **月刊7誌**



創刊



年長児のための新しい総合絵雑誌
キンダーメイト
おおぞら おかあさんもいつしょに
団体購読価 月 300円

豪華な上製本



科学する心を育て自然に親しませる
しぜん-キンダーブック図
4月号 『なのはなとむし』
●付録・こいのぼりの工作
団体購読価 月 300円

豪華な上製本



幼児の美しい心を育てる
キンダーおはなしえほん
4月号 『おかあさんの 花』
●付録・こいのぼりの工作
団体購読価 月 300円

ワイド画面付



情操をゆたかにし創造力をのばす
キンダーブック図-情操
4月号 『むくの おさんぽ』
●付録・こいのぼりの工作
団体購読価 月 200円

ワイド画面付



観察の眼をそだて心情をゆたかにする
キンダーブック図-観察
4月号 『はるを みつけた』
●付録・こいのぼりの工作
団体購読価 月 200円

特製厚紙製本



幼児らしい夢をそだてる絵本
キンダーメルヘン
4月号 『があこちゃんのだんじょうび』
●付録・こいのぼりの工作
団体購読価 月 200円



保育の実践に協力する
保育専科 - 今月のカリキュラム -
4月号
特集 80年代・私の保育ビジョン
定価 350円